
鑑定士な日々

ぺかちう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鑑定士な日々

【Nコード】

N3561N

【作者名】

ぺかちう

【あらすじ】

とある街の片隅で鑑定屋を営む男。

彼には他人には言えない秘密があった。

それは……

プロットが激甘なので色々と適当です。

プロローグをちょこつと修正しました。

プロローグ（前書き）

少し修正しました。

プロローグ

ああ……これは夢だ。

何故なら、幼い頃の俺が母さんに膝枕されながら転寝している光景を見下ろしているからだ。

それに母さんは『あの時』に死んだのだから。

眠っている俺の頭を膝に乗せながら、母さんが何かの歌を口ずさんでいる。

それは不思議なメロディの歌をうたいはじめた。

一番艦は森の中
眠れる竜が護ってる

二番艦は砂の中
怒れる鳥が護ってる

三番艦は無くなって
彷徨^{さまよ}う虎は泣くばかり

四番艦は雪の中
賢き亀が護ってる

全ての要、零番艦
王様乗せて消えちゃった

……コレって聞いた覚えが無いんだが……
ぶっちゃけ初めて聞いた。

母さんは俺が寝ていた時にだけ歌ってたのか？
何故？ 全然意味不明なんだが……

母さんはさらに歌い続ける。

竜の弱みは鳥の羽根
鱗を溶かす赤き羽根

鳥の弱みは虎の爪
焰を引き裂く白き爪

虎の弱みは亀の甲
風をも散らす黒き甲

亀の弱みは竜の鱗
雷纏う蒼き鱗

全然意味不明だわ
何この夢？

「はッ……………やっぱり夢か……………」

あれ？ 一体何の夢を見ていたんだっけ？」

変な夢を見た記憶があるんだが、詳細が全く思い出せない。

何だか懐かしかった印象だけ残っているんだが、それだけだ。

暫くの間俺は思い出そうと頑張ったのだが、結局時間の無駄だった。

「ふあああ……………つてもう夕方かよ！」

俺はどうやらいつのまにか眠っていたらしい。

ここはこの街の外周部にありふれた、寂れた裏通りにある雑居ビルの最上階の部屋。

ここが現在の俺の職場兼住居である。

部屋への移動手段はエレベーターなどという高級なモノは付いてないので、ひたすら階段を使うしか無い。

そんな訳で家賃は意外と安かったのだが、買い物や様々な用事を済ますためにいちいち階段を昇り降りするのは結構キツイ。

それに建物の立地も悪いせいか、新規の客などは全然来ない。

実は他にも理由があるのだが、今は話さないでおく。

そんな訳でウチに来る客は、ほとんどが以前から顔なじみのお得意さんか、ごくたまに彼等から紹介されて来る者達ばかりだ。ただ……俺的にはこの場所も客層も両方気に入っているから無問題なのだが。

紹介で来る客にはあまり変な人は居ないし、それに俺は人付き合いがどちらかというと苦手な方だから、馴染みの客ばかりなのは正直有り難い。

それに何より俺はこの場所が好きなのだ。

ここの良い所は、他の雑居ビルより一階分だけ高いので、回りの景色が良く見える。

そのため家に居ながら街を一望出来るのが俺のひそかな自慢なのだ。

……別に俺は馬鹿だから高い場所が好きとかでは無い。

無いったら無い。

そんな訳で寝起きの俺は、窓の側にある大きな机の椅子に身体を委ねるように深目に座りながら、いつもと同じようにボケ……と窓の外の景色を見ていた。

窓からは遠くの山に日がゆっくりと沈んでゆくのが見える。

先ほどまで夕日によって朱一色に染められていた街は、徐々に暗くなりつつあり、街のあちこちではぼつぼつと明かりが点り始めた。そんな寂しげな風景とは反比例して、窓から見える下の通りには徐

々に人出が増えてるように感じられた。

今日の仕事が終わって家路につく者、歓楽街へと騒ぎながら繰り出す者、夕飯の材料や惣菜等を買いに商店街に向かう者など、様々な理由を抱えた者達の歩く姿が窓から見える。

俺は窓からそんな街の様子をぼんやりと眺めながら、

（今日も一日無事に過ごせたな。

お客も来なそうだし、今日はもう店じまいをするか……）

と考えていた。

そして日が完全に落ちて街が別の顔を見せる頃、俺は店を閉め終えていた。

さて、今夜は何を食べようか？

鑑定士と悪友

俺が目覚めた時、見えたのはいつもの天井では無く、木製の床と薄汚れた布だった。

そしてガタガタツと言う音と共に、結構な振動が床に付いた頭や頬に伝わってきてひどく痛い。

多分この衝撃で起きてしまったのだろう。

（つて待て！　ここはどこだ？　何でこんな場所に寝ていたんだ？）

そう思いながら俺は立ち上がろうとして、そこで初めて身体の異変に気が付いた。

俺の身体は縄でグルグル巻きにされ、身動きが取れない状態にあったのだ。

（ナニコレ？　もしかして俺、拉致されちゃった？

しかし誰が一体……俺の家には、俺に対して悪意や害意を持つ存在は侵入出来ない筈だし。

いや、そもそも敵なら『アレ』が処分する筈……

それなのに実際俺はこんな状態だし、全然理解出来ないわ……）

思考を重ねるうちに徐々に落ち着いてきた俺。

それだけ色々と面倒な事に巻き込まれてきた経験がそうさせたのだろう。

（……もしかして敵意や害意とかを俺に抱いていない奴の仕業か？
そうなると話が全然違ってくるな……

もし俺の予想が的中しているとしたら、こんな馬鹿な事するのはあの馬鹿共しか居ないんじゃないのか？）

実は俺にはこんなアホな事をする奴は一人……いや実質二人だけ心当たりがあった。
それを確認するためにも、俺は今居る場所がどこなのかを調べなければならぬ。

まず俺は自分が触れているモノを中心に『鑑定』を試みる事にした。

「鑑定開始」

キーワードを唱え、自ら軽いトランス状態に移行する。
すると目の前に突如ステータス画面が現れた。

これは俺にしか見えない幻みたいなのらしい。

これが俺の隠された『能力』である。

まあ今回は広く浅く鑑定するつもりなので、あまり深くは『潜る』事はしない。

それをするとか酷く疲れるからだ。

俺はステータス画面にあるマウスポイントを思考のみで移動させ、『カスタム鑑定』に合わせ、その中の『簡易鑑定』をクリックした。するとステータス画面には『簡易鑑定中』という文字が点滅していたが、暫くすると『完了しました！』という文字と共に、今回の鑑定結果が表示された。

【簡易鑑定結果報告】

『構成物質鑑定結果』

床……木材（魔法付与）

布……綿布（魔法付与）
杵……鉄（魔法付与）
縄……麻縄（魔法付与）

『名称鑑定結果』

馬車（幌付き・魔法付与）
捕縛縄（魔法付与）

『価格鑑定結果』

合計価格：鑑定不能

内訳

馬車本体価格：銀板二枚
縄本体価格：銅板二枚
付加価値：
馬車：鑑定不能
捕縛縄：鑑定不能

馬車に対しては複数の魔法付与がされており、正確な付加価格は鑑定不能です。

正確な鑑定結果を知りたい場合、『通常鑑定』もしくは『詳細鑑定』を選び直して再鑑定して下さい。

俺はあまりの鑑定結果に呆れていた。

（ナニコレ？ 何でたかが幌馬車や捕縛縄に『魔法付与』をしているんだ？

それもこんな粗末な馬車や縄に複数『魔法付与』しているとか……
馬鹿なの？ 死ぬの？

高級馬車とかならまだ理解出来るんだが……何て勿体無い事をする
かな？

あの馬鹿達は今もこんな無駄な事をしているのか？

何故俺が呆れたかと言うと、『この世界』では『魔法付与』をする
には最低でも金貨十枚または金板一枚は必要だからだ。

ちなみに金貨一枚は銀板十枚に相当し、さらに銀板一枚は銀貨十枚
に、銀貨一枚は銅板十枚に相当する。

そして銅板一枚は最小額貨幣である銅貨十枚に相当し、その銅貨一
枚で菓子パン一個が買えるので日本円にして大体五十円から百円に
相当すると思われる。

（簡単に書くところだ。

金板一枚 金貨十枚

金貨一枚 銀板十枚

銀板一枚 銀貨十枚

銀貨一枚 銅板十枚

銅板一枚 銅貨十枚

銅貨一枚 五十円～百円

何故『』なのかと言うと、実際には両替するのにも金がかかるの
である）

つまり金貨十枚とは日本円に換算すると、最低でも五百万円……最
高で一千万円に相当するだろう。

この程度の幌馬車にかけても意味が無い。

もし壊れても銀板二枚も出せば新しいモノが買えるからだ。

（無駄金使う余裕があるなら、孤児院にでも寄付しろってんだ馬鹿

共が！)

そんな事を考えていると、突然幌の中が明るくなり、男が幌の中に入って来た。

近付いてきたそいつは俺の顔を覗きこんで、こう話しかけてきた。

「お？ やつと目覚めたか鑑定士！」

「……やはりお前か……」

俺に声をかけてきた男はやはり予想通り俺の悪友であり、今回の犯人と思われる馬鹿共の片割れでもあるジョンドウだった。

鑑定士の逃走準備

「……で、何故俺がこんな目に遭わされている理由は当然聞かせてくれるんだよな？」

そう聞いた俺に対し、ジョンはおどけて答えた。

「うゝん……ノリ？」

それを聞いた俺は激怒した。

「聞きたいのはそういう事じゃない！」

そもそもノリで不法侵入と拉致をする奴が居るか！」

「ここに居るが？」

しかしコイツは澄ました顔で平然と言つてのけやがりました。
落ちつけ俺！

「……それはもういいから、何故俺がここに居るかをちゃんと話せ。
また話をこまかす？ならコツチにも考えがあるぞ？」

だがコイツはヘラヘラ笑いながら俺に言つた。

「無理だな。」

それは『強制拘束』がかけられているから、いくら鑑定士でもその
状態からは逃れられないぞ？」

「……言ってる」

俺はジョンにそう言い放ち、その後はだんまりを決め込んだ。そんな俺を見て『ちよっとは諦めたが腹は立てている』とでも思ったのだろう、ジョンは俺を宥めるような口調で話しかけてきた。

「まあまあ落ち着け。あとちよいとだけ我慢してくれや！
目的地に着いたらちゃんと話すからよ！」

そう言い終えるとジョンは再び幌の外に出て行き、再び幌の中は薄暗くなった。

俺は今回の事について考えた。

（……何かが変だ。

確かにアイツは馬鹿だ。

だが今まではこんな風に他人に理不尽な行為をするような奴では無かったんだが……

一体何かあったんだ？）

しかし考えても解る訳ではないので、一旦ここで切り替える事にする。

俺はジョンが外に出て暫くしてから再鑑定を開始した。

ただし今回は声を出さない。

この幌馬車には『魔法付与』が複数されているので、もしかしたらその中に『盗聴』や『檻』のように嫌らしい効果を持つモノがあるかも知れないからだ。

（鑑定開始）

再び現れたステータス画面を操作し、『再鑑定』という項目を選択した。

これは以前に鑑定した対象全てが自動的にリストアップされるという便利なモノである。

当然目の前に鑑定対象が無ければ再鑑定は不可能であるが、鑑定した情報を参照する事は可能だ。

俺はそのリストの『新規登録順に表示する』をクリックすると、一番上に『馬車（幌付き）』と『捕縛縄』が表示された。俺はまとめてそれらをクリックし、『詳細鑑定』を選んだ。すると色々な鑑定方法が出て来た。その中から俺は『魔法付与動産鑑定』を選びクリックする。

「ッ！」

クリックした瞬間、突然頭に鋭い痛みが走るが我慢する。

これは『詳細鑑定』の副作用なので仕方無いのだ。

ひたすら我慢するしか無い。

ステータス画面には『詳細鑑定中』という文字が点滅している。

（まだか……まだなのか……？）

そして漸くステータス画面に『完了しました！』と表示された時、俺はかなり疲れていた。

【詳細鑑定結果報告】

『魔法付与動産鑑定結果』

馬車（幌付き）：

物理防御

魔法防御

属性半減

反応上昇

捕縛縄：

強制拘束

反応下降

魔力封印

どうやら嫌らしい魔法はかけてはいない様子だが……
やはりアイツは馬鹿だ。

特に『捕縛縄』に魔法付与を三つも施すなんて馬鹿以外の何物でも無い。

それも『強制拘束』『反応下降』『魔力封印』なんて犯罪チックな効果ばかり……

あの馬鹿は普段コレを一体何に使っているんだ？

まあ実はそれすらも『鑑定』出来なくも無いのだが、何かエロい事に使われていたら嫌だから敢えてしない。
他人のプライバシーにも関わるしな。

さて今はやらなくてはならない事に集中し直さなくては……
俺が今からやる事は、特に他人にバレたらマズい。
だから最低限の事しかするつもりは無い。

……アイツが完全に敵だと解っているなら容赦はしないんだが、ついアイツの言動にちょい切れてしまったのでアイツ自身を『鑑定』し損ねたのだ。

まあさつきは結局身体が触れていなかったし、無理に触ったりしたら『何かあるな?』と疑われただろうけど。

しかしアイツとは知り合ってまだ五年程度だが、多少なりとも心を通わせた事もある。

だからこんな馬鹿な事をした理由を最初から聞かせてくれれば別に無かった事にしても良かったのだが……

もう遅いかな。

俺は『捕縛縄』に付与された魔法を『裏鑑定』する事にした。
今度は少し深く『潜る』必要があるが、アイツに一泡吹かせるにはやらなくては気が済まない!

(裏鑑定………開始!)

鑑定士の実力

結論から言うと、幌馬車からの逃走には成功した。

捕縛縄にかけられていた三つの魔法付与を、『裏鑑定』で新たな魔法付与へと書き換えた内容が功を奏したのだ。
もしかしたらまだ逃げ出した事にすら気付かれていないかも知れない。

実はその後が問題だったのだが。

書き換えた魔法付与『加速装置』の効果によって街までかなり早く戻れたのだが、面倒な問題が発生していた。

何者かが俺の職場兼住居内に居るようなのだ。

何故解ったのかと言うと、先ほど書き換えた魔法付与のうちの一つ……『気配察知』によってである。

ドアを開ける前に複数の気配が中にある事を気付けたのは僥倖だった。

もし俺が逃げ出す時に、魔法付与『気配察知』へと書き換えていなかったら……

（ちょっと前の俺、グッジョブ！）

俺はさっきコレを選択した俺自身に感謝した。
だが、その後の俺の頭には新たな懸念が浮かんできた。

（しかし、もう逃げ出したのがバレたのか？
いや……流石にそれは無いか。だが余りに手を回すのが早過ぎる。
それとも……まさか俺が逃げ出す事までアイツの想定内だったとか？）

だがそれだと俺が考えていたケースよりかなりマズい。
何故なら、俺が逃走する可能性をアイツが考慮していたと言う事に外ならないからだ。

（うーん……あのまま大人しく連行されていた方が何とかなったかも？

……いや、ここまで念入りに用意周到なのを見ると、俺の秘密にある程度気付いていると思っただ方がいいだろ……

ああ見えてもアイツは金持ちなんだから、それしか考えられない）

金目的というのはちょっと弱い。

アイツの実家は超金持ちなのだ。わざわざこんな回りくどい事をしなくても、いくらでも実家から金を引き出せるのだから……

ならば俺自身の何らかの秘密に気付いた、と考えるのが妥当な線だろう。

だが一体いつバレたのかが疑問として残るが。

何故なら俺は他人の前で『裏鑑定』を使った事は無いからだ。

（色々考えるのは後だ！　グズグズしている訳にも行かないし……
まずはここから安全な場所に逃げるのを第一に考えよう！
最初に俺がやるべき事は……まずは室内にいる不審者の駆除だな。
その後は家中にある魔法付与を何かに移して、後は……隣国にでも逃げますかね？）

そして俺はドア自体にかけてあった魔法付与『一見客断』を『裏鑑定』によって『空気操作』へと書き換え発動させると、一瞬にして室内の空気が室外に抜かれた。

多分これで中に居た不審者は気絶して無力化されている筈だ。

だが念のために三分ほど時間を置いてみた。

それから『裏鑑定』を破棄し、『空気操作』を『一見客断』に戻してドアを開ける。

（……開かない……？　その前にドアノブがめちゃ冷たいんですけど？）

冷たさを防ぐために捕縛縄をドアノブに巻いてから力を入れたら漸く開いた。

……開いたのだが、ドアの上枠部分から小さな氷のかけらがパラパラと落ちてきた。

「へ？」

……これは全くの予想外だ。

中は物凄く寒かった。

息が白くなるほどに室温が下がっていた。

あちこちが凍りついており、空気中がキラキラ輝いていた。

（あれか？　真空冷却とかそんな感じか？

マジ恐ろしいんですけど！　使用方法を誤ると危険だよコレ！）

結局部屋の中には男女が五人ほど氷の像と化していたが、『鑑定』の結果全員死んでいた。

どうやら一瞬で冷凍死したようだ。

そのうち女性は二人だったが、意外と美人だった。

ちよつと勿体無いと思ったのは秘密だ！

（窒息させて一瞬で気絶させるつもりだったんだが……失敗した！
しかしコイツら、どこかで見た顔だな？）

よく見たら、皆アイツの紹介でウチに鑑定に来た奴等だった。
だから『一見客断』の効果が無かったのだらう。

（南無南無）あと色々持っているモノは俺が貰っていきますね
ゴメンネ！）

喋ると口が凍るので、心の中だけで謝罪する。

それぞれ一つずつ魔法付与されたモノを持っていたのを見ると、かなりの手練れだったのかも知れない。

危なかった……

それから俺は、職場や住居やドアにかけていた魔法付与や、盗難防止のために一見くだらないモノにかけておいた魔法付与や、捕縛縄にかかっていた魔法付与を全て、ちよつど持っていた指輪やアクセサリーに『裏鑑定』で書き換えて、戦闘に必要なモノはそのまま身に付けた。

これで準備は完了なのだが、大きな問題が残っていた。

（さて……死体がここにあるのはマズいな）

下手をすると殺人犯として追われてしまう可能性がある。

そこで指輪にかけ直した魔法付与『一見客断』を『空間操作』に書き換え、五つの死体のある場所へと転移した。

その日、流れ星が幾つか流れたのだが、生憎と昼間だったので誰にも気付かれなかった。

鑑定士の感傷

俺は窓から空を見上げていた。

「そろそろかな？」

そう言ったか言わないかのうちに遙か上空で何かパツと光った気がしたのだが、結局俺にはよく解らなかった。

「……やっぱりよく見えなかったか……」

けど……彼等は迷わずにちゃんと星の一部として還れたかな？」

俺は空を見上げながらそう呟いていた。

実は俺、意外とロマンチストなのだ（笑）

さて、後の問題はこの部屋の中にある俺の持ちモノをどうするかなのだが……

普通に引越す場合なら当然持って行くモノは山ほどある。

だが残念ながら今後の俺の行動は、どんなに言い繕っても所詮逃亡生活に過ぎない。

今後予想される追手からの追跡を振り切り、安全な場所に腰を落착けるまでは流浪の旅の連続が既に確定済みなのである。

例えば新たに魔法付与した何かの効果でこの部屋の荷物を全て持つて行く事も不可能では無いのだが、それは限られた魔法付与を無駄

に使用してしまうと言う事に外ならない。
その魔法付与があるか無いかで生死を分ける場合もある筈だ。
なのでそれは却下した。

大体この部屋にあるモノはそうそう高いモノでは無いのだ。
俺が五年前にここに住んでから徐々に買い集めたモノのために、わざわざ魔法付与の枠を一つ消費するのも何だか馬鹿らしいし。

そもそも俺は『あの惨劇』で文字通り全てを失っているのだ。
失うのはもう慣れている。

金で買えるモノはまた落ち着いたら買えばいい。
結局旅に必要な最低限の荷物以外は全て置いて行く事にした。

しかし、その時ふとある事を思い出してしまい、今までの思考は全て無駄になったのだがw
時間の無駄だったわ……

結局俺は予備の魔法付与を一つ使い、それを『四次元袋』に書き換えて、部屋の中のモノを自分の服のポケットに全て収納した。
そういう訳でちょっと遠回りをしたが、俺の旅立つ準備はこれで全て完了した。

俺は何も無い部屋の中をぐるりと見渡す。
俺の頭の中には、この部屋で過ごした日々が走馬灯のように浮かんで消えていった。

別名『ハタ師』とも言われる露天商をして稼いだ金で、自分の店を持つ事を夢見ていた日々。

漸く貯金が目標額まで貯まり、店の物件を探し始めた日々。

内装がボロボロかつ階段しか無い立地のためになかなか借り手が付かなかったこの部屋を、激しい値引き交渉の末に格安で借りるのに成功した事。

ボロボロだった部屋の内装を自分で直そうとして、頑張って大量の資材を階段を使って運び込んだまではよかったのだが、翌日は全身筋肉痛で殆ど動けなくなってしまった事。

凝り性の性格が災いして当初予想していたよりもリフォーム費用がかかってしまい、開店予算の不足分を補うために結局住居の方のリフォームは後回しになってしまった事。

店の方の内装のリフォームも何とか終わり、希望に胸を膨らませて鑑定屋を開いたのだが、最初の客がなかなかつかなくてマジでヘコんだ事。

気分を切り替えるために街へ遊びに行き、夕食を食べに行った先で偶然相席になった人を何となく『鑑定』したら、実は正体が連続強盗犯で賞金首だという事が解ってしまい、内心ビクビクしながら何とか食事を済ませ、店を出たら一目散に駐在所に駆け込んだ結果、大捕物の末に逮捕された事。

通報した賞金が貰えて、（これで住居の方のリフォーム費用や生活費も暫くの間は大丈夫だ！）と安心した事。

そして……その件が縁でアイツと出会い、最初の客になってくれた事。

……何でアイツが裏切ったのかは後で考えよう。
今はやるべき事をやらなきゃな。

それから俺は世話になった部屋に対し、最後の挨拶をした。

「……五年間お世話になりました。ありがとうございました！」

ちよつと涙が出そうになるが我慢する。

そしてドアの表に『閉店のお知らせ』と書いた紙を張っておく。

家賃の方は半年先まで支払ってあるから、大家さんにも迷惑はかけないだろう。

それから俺は、ある場所へと移動するために『空間操作』を発動させた。

目的地は……この街にある孤児院だ。

何をしにつて？

不要なモノを押し付け……まだ使えるモノや、さっき死体を漁って見つけた金を寄付しに行くんだよ！

中古の家具とかでも、その筋の店に売れば少しは金になるからな。

それにあそこは……俺が昔世話になった場所でもあるから、少しでも恩返しがしたいのだ。
流石に魔法付与されたモノはあげられないけどな。

鑑定士と幼女

魔法付与『空間操作』が発動する直前、何かが割れる音が響き渡ると同時に発動がキャンセルされてしまった。

それと同時に錆が浮いた鉄が俺の顔に物凄い勢いで向かってきた。

（あ、ヤ）

ヤバイと心の中で言う暇すら無く、鉄は俺の顔面に突き刺さ………らなかつた！

魔法付与『要塞堅防』ようさいけんぼうが自動的に作動したからだ。

これは一定ダメージ以下の攻撃は自動的に全てキャンセルされてしまふという反則級の魔法付与である。

当然本物の魔法付与では無く、ついさっき俺が『裏鑑定』で書き換えた真つ赤な偽物だ。

効果は見ての通り抜群だがな！

ちなみに本物はこの世界の勝ち組宗教団体であり、俺が世話になっていた孤児院の母体でもある『神聖マリアンヌ教』の総本山に御神体として祀られている。

俺は『とある事件』の折りに運よく本物を見る機会があつたので、その時にこつそり『鑑定』出来たのだ。

で……話を戻すが、この鉄を投げた何者かの正体には実は心当たりがある。

それは誰かと言うと……

「折角逃げられないように転移の魔法付与を解除したのに、まさか別の魔法付与で防ぐとはね……」

貴方は一体幾つの魔法付与を持っているのかしら？

そんなにお金を持っているようには見えないんだけど……

まさか裏では何か汚い仕事をしてないわよね？ 例えば人身売買とか……」

そう言いながら俺の前に現れたのは、一見すると五歳くらいの少女だった。

ただし彼女は人間ではない。あくまで『生き人形』だ。彼女と会った話はまた別の機会に……

しかしおかしい。

好戦的な彼女が徒に人間を傷付けないようにするために、前に彼女自身に魔法付与『機人原則』をかけていたんだが……

ちなみに元ネタはロボット三原則だったから『生き人形』にも効果があるかは疑問だったのだが、ちゃんと効果はあったんだよね。

でも何故魔法付与『機人原則』の効果が解けているんだ？

それに……どうやって『空間操作』を解除したんだ？

「ちょっと聞いているの？ それとも本当に何かやって……」

「やってない！」

「じゃあ教えなさいよ。何故貴方はそんなに色々魔法付与された武器や道具を持っているのかしら？」

「黙秘権を行使する」

「……なら早く死になさい！ 今からまた鋏を投げてあげるから！」

「いや無理！ 流石に避けなきゃ下手すると死ぬし！」

それに魔法付与の発動を強制的に解除する技を使えるなんて初耳だが？」

「あら、もうバレたの？ でもそれは乙女のひ・み・つ！」

……ちょっと可愛いと思ったのは秘密だ！

しかし何時の間にそんな特技を身に付けたんだ？

『再鑑定』を試してみるか……

そして俺は彼女を『再鑑定』してみた。

すると、何故か『機人原則』が発動しておらず、新しい魔法付与された真銀のペンダントを持っているのが解った。

真銀のペンダント：NEW！

魔法解除

（何故こんなモノを……）

そこまで考えて俺は漸く真相に辿り着いた。

（コイツ……俺を売ったな！

室内にかけてあった魔法付与が発動しなかったのは多分コレのせい

だ。

あの馬鹿はこれを使って俺の住居部分に侵入したんだろう。
そこでコイツの魔法付与が解除されて……あの馬鹿を見逃す代わりにコレを貰ったに違いない……！）

俺はその予想をそのまま彼女に話した。
するとあっさり認めやがりました。

「てつきり死んだものと思ったのに生きているなんて……
全くアイツも役に立たないわね……
それとも最初から殺す気が無かったのかしら？」

「……よくわかった。だが流石に恩人にその態度は無いんじゃないか？」

「恩人？ 誰が？ 私に無理矢理あんな事（１）をしたのは誰よ！
私、初めてだったんだから！」

（１）魔法付与『機人原則』をかけた行為です！

「聞き方によっては俺がお前に何かしたように聞こえる風に言うのは止める！」

「だってそうじゃない！」

絶対無理だって私は抵抗したのに……無理矢理するなんて最低よ！
こんなに小さい身体にあんな凶悪なモノ（２）を入れたり（３）
かけたり（４）……ン　　！」

（２）魔法付与『機人原則』の事です！

（３）発動させた行為です！

（４）魔法付与を彼女にかけた事です！

俺は慌てて彼女の口を塞いだ。
だが少し遅かったようだ。

……何だか急に近所が騒がしくなってきたのだ。

「小児性愛野郎は殺す！」とか、

「ボ、ボクが癒してあげるから！」とか、

「殺すコロスころすKOROSU……！」とか……

ここに居るとまた要らぬトラブルに巻き込まれそうだ。
俺は彼女の口を塞いだまま、孤児院へと転移した。

鑑定士と孤児院長

俺が住んでいる場所とは街の中心を挟んで丁度反対側の街外れには、立ち並ぶ雑居ビルの谷間にひっそりと一軒の古びてはいるが立派な屋敷がある。

そこが俺の目的地である孤児院だ。

だが……俺は現在進行形でその孤児院である屋敷に向けて絶賛落下中なのであった。

何故こんな事になったかと言うと、さっき慌てて転移したせいで転移先の座標を間違えてしまったのだ。

具体的には高さが百メートルほどなので、墜落死するのは時間の問題だ。

「きゃああああ！ あ、アンタ早く何とかしてよ！」

しかし幼女（偽）が五月蠅い。

だが何とかしなくてはならないのは俺も同意だ。

いくら何でもこの高さから墜ちたら俺は間違いなく死んでしまう。

だが今の状態で『空間操作』を使い地上に転移する事は出来ない。何故なら俺の身体に働いている運動エネルギーは転移した後も存在するからだ。

もし地上に転移したら、今の運動エネルギーがそのまま身体に働き、結果的に俺は地面に叩きつけられるのと同じ状態になってしまっただろう。

(仕方無い……一日三回しか出来ないが……)

そして俺は禁断の秘技に手を出した

「『アレ』は一体何なの？　ねえったら！」

幼女がさつきから煩い。

多分さつき俺がした行為についてだと思いが無視する。

それよりもさつきから頭痛が酷い……今日はマジで能力を使い過ぎた。

早く安全な場所で眠りたい。

その前に孤児院に粗大Gom……中古家具とかをあげなきゃな。

俺は正門とは違う方向に歩き出した。

「ん？　何でそっちに行くの？　そっちに何かあるの？」

幼女が不思議がつて聞いてきたので俺は答える。

「表からだとかキ共に見つかるからだ。

見つかる色々面倒だから、裏からコッソリ入るんだよ」

「ふ　ん」

納得した様子の幼女。

そしてニヤリと笑う。

「……見つかると色々とマズイのよね？」

……まさか！

「あ　！　アンタ！　何でこんな場所に居るの！」

そう言いながら少女は俺にしがみついてきやがりました！

「ここで会ったが百年目！　絶対に逃がさないから！」

「離せ！」

「イ・ヤ！」

そうやって騒いでいるうちに何を騒いでいるのかを覗きに來た孤児のガキ共に気付かれてしまった。

「あ！　鑑定さんだ！」

「本当だ！　何騒いでいるの？　それ誰？」

「かんでーにいたん、あそんで！」

「あ！　ぼくも！」

「わたしも」

俺はガキ共にあっという間に纏わり付かれた。

「今日はちよいと忙しいから遊べないんだ。悪いな」

え

……だから嫌だったんだ。
覚えてる幼女め！

幼女は犠牲になったのだ。

てゆーか面倒だからガキ共に押し付けてきた。

「な、何でこんなに強いの!?　　ってちよつと待った!」

無理無理無理　　!!!!!!」

どこかで幼女の叫び声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

さて、ここが俺の第二の故郷でもある孤児院である。

ここの孤児院長は足りない資金分は私財を投げ売って孤児達を育てている人格者であり、この屋敷も元々は孤児院長が両親から相続したモノらしい。

昔は地上げ屋とかが度々ちょっかいを出してきたそうだが、孤児院長自らその剛拳で性根を叩き直していたとか……

そう。孤児院長は凄く強いのだ。

ガキ共に護身術を教えているのも院長だしな。

ガキ共に護身術を教えている理由は、昔誘拐事件が有ったからだ。
実はその被害者は俺自身の事だ。

ちなみに俺を人質に取って『屋敷を手放せ』と脅してきた馬鹿な輩は、院長自らによる『OHANASHI』によって悔い改め、さらに彼等は財産を全て寄付して貰ったそうだ。

……一体どれだけ強かったんだよw

てゆーか、どつかの地下迷宮にでも一ヶ月くらい潜ってれば、一年分の孤児院運営費用くらいは軽く稼げるのでは？ と思うのだが……
まあ今はかなり落ち着いたとは本人の言だが、凄く怪しい。

実際過去に何度か孤児院長を『鑑定』してみようと試みたのだが、何故か能力値が全て『Unknown』になっていたからな……

そうそう……そう言えばジョンドウの奴は能力値はちゃんと読めたんだが……何故か知らないが名前とかがバグっていて一部の情報が読めなかったんだよね

別に気にしないけどな。

さて、そんな事を考えているうちに、院長室の前に着いた。

俺はドアをノックした。

“コンコン”

「どうぞ?」

中から返事があったので俺はドアを開けた。

そこには二十歳前後に見えるシスターが居た。

だが彼女こそ、この院長でもあると同時に正司祭でもある実力者なのだ。

「あら珍しい……『星の知らせ』があつたから、一体何なのかな？
って思っていたんだけど……」

彼女は本当に変わらないな。

俺がここに居た時と全く変わらない容姿なのだ。
少なくとも四十代なのは確かなのだが……不思議だ。

「うら若い女性の歳を考えたり秘密を探ろうなんて失礼な行為よ？」

……何故バレた？

「顔に書いてありますよ？」

俺のポーカーフェイスが完全に読まれている……だと？

「特に今日は読みやすいし……何かあつたの？」

「ああ……納得しました。今日は朝から色々あつたので体調が悪い
んですよ」

「そう……て、今日は何か用事があるみたいだけど、一体何かな？」

そこで俺は今日来た理由を切り出した。

ある程度は事情を話さなきゃならないか……

鑑定士の過去

「突然なんですが俺、この街を出て行く事になりました。でも色々あって今家にある家具とかを持っていけそうに無いんですよ。」

だからもし良ければ全て貰っていただけませんか？」

「それはウチとしても助かるから構いませんけど……随分急な話ですネ。」

何か問題でも起きましたか？

もしそうなら私が直々に仲裁しますが？

もちろんタダじゃありませんが……」

「いや……今回はトラブルと言うか何と言うか……」

実は俺の『アレ』が他人にバレたかも知れないんですよ。

ついさっきまで拉致されていましたし。

だから暫くの間姿を隠そうと思ひまして……」

「え！？ また拉致されたのですか？ しかし貴方はよく拉致されますネ……」

「院長、今驚くべき所はそこじゃありませんよ？

それに拉致されたのは今回でまだ二度目です！

まるで俺が何回も拉致されるような危機感の薄いアホの子みたいな発言は止めて下さい！」

どうやら院長の天然ボケは未だ健在らしい。

「でも何故『アレ』って言うのですか？

昔私にコッソリ教えてくれた時は確か……『何でも鑑定出来る程度の能力』とか言っていたじゃないですか？

あとは『ちゅうに』とか、よく解らない事も言っていましたよね？」

「やめて

！ 俺の黒歴史を思い出させないで

！！

！！」

……今までの話の流れから既にお分かりの方々も居るかも知れないが、あえて言わせて貰おう。

実は俺、『トリッパー』なのだ。

一応両親が居たのでカテゴリー的には『転生者』だと思うのだが、はつきりとは断言出来ない。

何故なら今の『俺』を俺と認識したのが小さい頃に死にかけた事故が原因なので、もしかしたら『憑依』や、単に誰かの記憶に繋がっただけかも知れなからだ。

まあ多分『転生者』だと思うから、以後はこれで通す事にする。ちなみに元の世界の俺がどうなっているかは全く覚えていない。

まあ簡潔に言えば、事故から目が覚めたら前世？の俺の記憶が今の俺に定着しており、同時に何故か『見たり触れたり出来るモノなら何でも鑑定出来る能力』が備わっていたのだ。

……別に超展開でも何でも無いぞ？

今までも俺の出身地である日本で使われるような用語をあちこち

で使っていたしな。
例えば……

『雑居ビル』 『エレベーター』 『トランス状態』 『ステータス画面』
『マウスポイント』 『カスタム鑑定』 『クリック』 『日本円』 『リ
ストアップ』 『グッジョブ』 『ロボット三原則』 『運動エネルギー』
『Unknown』 『バグって』 etc……

こんなにも出していたし、特にこの世界の貨幣価値はモロに日本円
と比較していたしな。

まあ詳しい話はまたの機会に……

「でもよく逃げ出せたわね？」

「もちろん『能力』を使って逃げ出してきたんですよ」

「あらら……そのまま殺してしまえば良かったのに……」

院長が何だか黒いです！

「まあそうしたかったのは山々だったんですが、拉致された相手が
相手です……」

「？ 拉致したのは誰か解ってるのですか？」

「はい。それがよりによってジョン＝ドウなんですよ……って院長
？ どこに行くんですか？」

「ちょっと聞き分けの無いコにお仕置きをして来るのよ？」

あとは大丈夫！

ちなみに賠償請求も私に任せて

あ、私が2で貴方が1でいいわよね？　ね？」

院長が守銭奴モードになってるううううう！

だがそれより気になる発言があつたので聞いてみた。

「ちょっと待って下さい！

『OSHIOKI』って一体何ですか？

ま……まさか『OHANASHI』よりも凄いとか？」

「？　一体何を言ってるの？

お話よりお仕置きの方が遥かに重い罰なのは当然でしょう？」

につこり笑いながら院長はさらりと言った。

だが俺は彼女の言葉が信じられなかった。

あの『OHANASHI』よりも遥かに重い罰　『OSHIOKI』

一体どれだけの威力を秘めたモノなのか俺には想像すら出来ない。
てゆーかアレよりも凄い罰って一体……

ブルルッ！

俺は思わず身体が震えてしまった。

そして過去に『OHANASHI』を間近で見せられたためにトラウマを負ってしまい、精神崩壊をしかけた頃の記憶が蘇ってきた。
ヤバイ！　何とか話題を変えないと！

「あ、あのですね……残念ながら証拠が無いんですよ……
必死に逃げてきたんでそこまで考えてなかったし……」

まあ証拠が無いのは嘘だが。

今は魔法付与『四次元袋』の効果で俺のポケットに入っている捕縛
縄があるしな。

ただ、『この世界』には指紋鑑定の知識は存在するが精度はイマイ
チなのだ。

不確かな証拠では逮捕にまでは結びつかないだろう。

それに獣人とか亜人とか呼ばれている人類に酷似した種族も多いし。
流石に肉球とかで判別するのは無理じゃね？

そんな訳で俺が拉致されたのが目撃されたとかならまだしも、こん
な縄だけじゃ何にもならないのが異世界の不便な点だ。

DNA鑑定技術が開発されたら話は別だが、それまで悠長に待つて
たら俺がアイツにまた何をされるか解らんしな。

「チツ」

（今「チツ」って言ったよこの人！

もう面倒だから院長は無視して、孤児院のどっか適当な場所に放り
出しちゃおうか？

別にポケットに入れっぱなしでも構わないんだが、余計なモノが入
っていると必要なアイテムをポケットから取り出すのに少し時間か
かかるんだよな……）

俺がそんな事を考えている間に、院長も幾らか落ち着いたらしい。

「……まあ次回からはちゃんとした証拠を持ってくる事！解った？

「じゃあ家具類は一階の倉庫に出しておいてね？」

「解りました！ ではまた……」

「頑張りなさいな」

そうして俺は漸く本来の目的を達して孤児院を出た。
さて、いよいよ旅立ちますか！

幼女？ 知らんがな（、・・、）

鑑定士の脱出

俺は幼女を肩車しながらある場所へ向かっていた。

あの後俺は追いかけてきた幼女に見つかってしまい、慌てて逃げ出したのだが結局捕まったのだ。

……まあ幼女と俺は魂レベルで『リンク』しているから、たとえば俺がこの星の裏側に居ようが幼女には察知されちゃうので最初から本気で逃げてはいなかったが。

本当だぞ？

逃げ出した途端に道路の石につまずいて、盛大にスッ転んだなんてアホな事なんかしてないんだからな！

か、勘違いすんなよ！

それに……これは幼女には内緒なのだが、俺には幼女の行く末を見守る義務があるから逃げる訳にもいかないのだ。

だからこそ、『もしあのまま孤児院に居てくれれば……』、と思った俺は悪くないと思う。

うん。

そして一通り幼女の攻撃を全て魔法付与『要塞堅防』ようさいけんぼうであしらった後に色々と今後の話をした結果、何故か俺と一緒に逃避行の旅へと行く事になっていた。

な……何が（ry

そんな訳で幼女と一緒に居る訳なのだが、彼女が比較的大人しく俺の言う事を聞いてくれたのは、多分どこか調子が悪いからだと思う。だからこそ俺は幼女を肩車しているんだがな。

話し合いの際に詳しい理由を言う訳にも行かなかったので、つい勢いで出任せ気味に、

『俺が一生面倒を見るから黙って俺に着いてこい！』
って言った時には、何だか幼女の顔が赤かったしな。

どうやら生き人形も人間と同じように、身体の調子が悪くなるようだ。

まあ機械だって調子悪くなったり壊れたりするから、有り得ない事ではないしなあ……

そんな訳で幼女はあくまでも身体の調子が悪いから今は俺の言う事を聞いてくれるだけであって、本心はまだ俺の生命を狙っているはずだ。

どうやら幼女の願いを叶えるためには、俺の……正確には『リンクした者の魂』が必要らしいからな。

だが俺はそう簡単には殺られないし特に問題は無い……と思う。

どうやら魔法付与『魔法解除』でも、俺の魔法付与『要塞堅防』は解除できないようだからだ。

まあコレはある意味当然か……？

魔法付与『要塞堅防』は魔法付与の中でも世界に数種類しか無い『原種』と言われているモノなのだ。

つまり魔法付与『要塞堅防』はあらゆる防御系魔法付与の最源流に位置するモノであり、かつ究極の形でもあると言える。

それを系統が違うとは言え、所詮補助系の上位魔法付与でしかない『魔法解除』では荷が重過ぎる。

「……何でコレは解除出来ないのかしら？」

さつきからそんな声とカチンカチン何かを防ぐ音がするのは全力で無視する。

視界の隅には缺のようなモノなんて見えている訳がある訳無いしな！
きつと幻覚か何かだな……今日はかなり疲れたから仕方無いな。

まあそんな感じで歩き続け、俺は漸く目的地へ辿り着いた。

その場所は街を囲む巨大な壁の前だった。

ちなみに俺は追われている事を考慮して、ここに来るまでの間は魔法付与『光学迷彩』を使っている。

これ以上余計なトラブルは勘弁だからな。

さて俺は両手の指に全て嵌めた指輪のうち、右手の中指に嵌めた指輪の魔法付与を発動させた。

そして俺は壁に向かって歩きだした。

「ちょ、ちよつと！ぶつかるから止まって！」

幼女が頭の上で騒いでいるが無視する。

そして……俺は幼女ごと『壁にめり込んだ』。

魔法付与『確率操作』

これは読んで字の如く『ある事象の確率を操作する』効果を持つ魔法付与だ。

今回はこの壁に対して『確率操作』を行った。

知っているだろうか？

物質というモノは素粒子レベルで考えた場合、かなりスカスカなのだ。

つまり……あくまで理論的には、天文学的な確率で壁を抜けたり出来る。

確か『トンネル効果』だったか？

そして魔法付与『確率操作』とは、そのごく小さな確率すら強制的に確定してしまうという反則を実現してしまうのだ。

つまり……可能性がわずかにでもあるのなら、何でも実現させる事が可能な魔法付与であるとも言える。

まあ俺が作った魔法付与なんだけどな！

そんなわけで、忍法壁抜けといきましょうか！

「……前から知っていたけど、貴方って規格外よね……」

魔法付与されたモノをたくさん持つてるし、空から落ちた時の『アレ』は変だったし……

で、今度は壁を抜けちゃうし……

貴方は一体何者なの？」

「……………ただの鑑定士だ」

「はい嘘！　こんな変態チックな鑑定士なんて居ないわよ！」

幼女は他にもギャーギャー騒いでいたが、俺はそれ以上何も答えなかった。

『転生者』って言っても絶対、『貴方……………一緒に病院行こうか？』
って言われるのがオチだからな。

まあこんな訳で無事に街から脱出できた訳なんだが……
さて、これから俺はどここの国へ行こうかな？

閑話 『悪友』の独白

「やられた……！」

俺はいつの間にかもぬけの殻になっていた幌の中を見て愕然とした。流石にあの芋虫状態から何の動きも無しに鑑定士に逃げられるとは思わなかったからだ。俺は内心で呟いた。

(……さすが『呪われし一族』の末裔だけはある……か)

『呪われし一族』

この世界で唯一、『神々』からの『加護』を一切受けていないという一族である。

そして鑑定士はこの一族の末裔なのだ。だがそもそも何故彼等が『神々』の『加護』を受けていないのか？その疑問に対しては、こんな伝説が残っている。

遥か昔……まだ『神々』がこの世界に存在したという『神々の時代』。

『神々』と同様に、今では伝説でしか知られていない忌まわしき『魔族』も存在していた。

だがそれでも世界は概ね平和であった。
何故なら、『魔族』は『魔族』同士で互いに覇を競い合っていたからだ。

しかしある時からその状況は激変する。

互いに争い合っていた『魔族』の勢力をひとつに纏め上げ、世界を守護する『神々』に対して反旗を翻した者が現れたのだ。

それを為したのは……『大魔王』と呼ばれる存在であった。
どうやら『魔族』以外からの出身であつたらしく、その名前は既に失われている。

そして彼の者が『神々』に挑んだ戦いの名は、『魔大戦』と呼ばれた。

その戦いは『神々』と『魔族』の間だけではなく、『竜』や『精霊』、そして『ヒト』や『亞人』、『獣人』を始めとするこの世界に生きる全ての生命をも徐々に巻き込んでいった。

そして問題の『呪われし一族』の話に戻るのだが、実はその『魔大戦』に際し、一族の祖となる人物　やはり名前が伝わっていないので、ここでは便宜上『彼』とする　は何を思ったのか『大魔王』側に味方したらしいのだ。

『彼』が一体何を以って裏切ったのかは伝わっていない。

そして永き戦いの結果、『神々』が多大な犠牲と引き換えに『大魔王』や『魔族』をひとつの大陸ごと地の底に封印し、『魔大戦』は終結した。

だが、『神々』もそれを機に深い眠りについてしまい、『精霊』や『亞人』に『獣人』も徐々に姿を消し、その結果残された『ヒト』

を中心とした『ヒトの時代』が始まったのだ。

『神々』は『ヒト』の前から消えてしまったが、『加護』という形で魔法を残してくれた。

だが、裏切り者の『彼』の血を引く者だけには何故か魔法が使えなかったのだ。

人々は噂した……『加護』が与えられないのは、『神々』の呪いだ
と。

それから彼等『呪われし一族』の受難が始まるのだが、それはまた別の機会に……

そんな訳で彼の血を引く一族には、『神々』から『加護』が一切与えられなかった訳なのだが、その代わりに彼等は『加護』が無ければ使う事が出来ない魔法とは異なる力……親父曰く『存在力』を自由自在に扱う方法を開発したのだ。

そして実は『魔法付与』という技術を生み出したのも彼等の一族であり、その御蔭で現在俺達は自分に与えられた『加護』と全く相性の合わない系統の魔法でも『魔法付与』されたモノを代用する事によって自由に使えるようになってる。

さて話を戻そう。

彼が『呪われし一族』の末裔なのを知ったのは偶然だった。

前に酒を飲んだ時に、酔った鑑定士がポロツと自分の両親の話を話していたのだが、両親共に『銀髪』で『左右の瞳の色が違う』特徴があったそうなのだ。

それを聞いた時、俺は確信した。

（コイツ……『呪われし一族の末裔』だ！）と。

……いや、正確には『呪われし一族の唯一の生き残り』が正しいか。何故なら、彼等は数年前に秘密裡に『処理』されたからだ。

それは俺が言うのも変な話だが、『ヒト』の欲望が引き起こした事件だった。

だがおかしな点がある。それは鑑定士の外見だ。

『呪われし一族』の血を引く者の外見の特徴としては、銀髪に左右で色の違う瞳を持つ。

だが、鑑定士は黒髪かつ黒瞳だ。

まあ今回の拉致事件の真相は、それを調べるために起こしたモノだったのだ……

俺的には反対だったのだが、親父を筆頭とした強硬派の意見が通ってしまい、仕方無く協力する破目になってしまったのだ。

その結果がコレである。全く以って情けない限りである。

その上さらに悪い事は続くようで、鑑定士を目的地まで運ぶために使った魔法付与済みの捕縛縄も持っていかれたのは実は物凄くマズい……！

アレは親父の収集物から無断で借りてきたモノなので、もし無くなつたと親父に知られたら俺は親父に叱られ……いや、叱られるなら

まだ罰としては軽い。

下手をしたら親父と俺との間で交わした『例の契約』を無効にされてしまうかも知れないのだ！

親父から聞いた話だと、確かアレを手に入れるのに金板十枚を支払ったらしいから……

しかし俺は今後どう行動すればいいのだろうか。

(……情けない)

自業自得な今の俺自身に対して自嘲した。

全ての責任は自分の願いを叶えるために親父と『契約』し、その手段として鑑定士を裏切った俺にある。

そして失敗したのは俺の油断が原因なのだ。

漸く色々と手を使った結果、油断し始めた鑑定士の信頼を裏切るような行為をして心を痛めていたのに、まさかコツチが油断した途端にあっさりと逃げられるとは……

クソッ！ 鑑定士め！

早く何とかしなきゃ、このままだと全てがおじゃんだ！

……まあ『保険』はかけてあるから何とかなるとは思うが……

「……嘘だろ？」

俺が街へ戻ってきた時には、鑑定士の部屋は既に何も無かった。俺が『保険』としてこの部屋に待機させていた部下も居なくなっていた。

彼等が裏切るはずは無い……となると鑑定士に殺されたという事になる。

それは由々しき問題だ。

彼等はああ見えて歴戦の戦士である。

あの五人が揃えば低級の『竜』すら簡単に倒せるのだ。それをあの鑑定士は倒したという事は……

（危険だ！ 危険過ぎる！）

甘かった。俺なら管理出来ると自惚れていた。

鑑定士が外見に似合わない実力を持つ事が解った今、俺から迷いや甘さは消えた。

やはり親父達の言った通り、『呪われし一族』は全て『処理』するべきなのだ。

それがジョンドウ……いや、『魔法監視機関・第28区広域監視員』としての使命なのだ！

鑑定士と濡れ衣

俺と少女は現在剣や杖を持った若い男女に囲まれていた。

一見ただの旅人に見えるのだが、身のこなしから戦闘訓練をかなり積んだ者達である事が解った。

所謂『冒険者』という輩だろうか？

それにしては構えにクセが無いというか何というか……

まあ気のせいだろうが。

「言え！　こんな芝居をしてまで我等に近付いたのは一体誰の命令だ！？」

彼等の中でもリーダーっぽい奴がさっきからウザい。

「知らんがな！　だからお前等の勘違いだつて！」

「まだ言うか！　怪しい奴め！」

それにその少女はどこから誘拐してきたんだ！　この犯罪者！」

「それは全力で否定する！」

さっきから話が平行線のまま全く進まない。

早くどっかの街に行って宿屋で眠りたいのに……

何でこうなった……

簡単に説明すると、森の中で山賊に襲われていた馬車を必死に守っていた彼等に味方して助けてあげたのに、何だか酷い誤解を受けているのだ。

つまりアレですよ。

俺が山賊を馬車にけしかける。

馬車がピンチ！

そこに颯爽と現れる俺！

まるで前もって山賊達と打ち合わせていたように俺が華麗に蹴散らす。

馬車の方々に俺が感謝される。

俺「（計画通り！）」「ニヤリ

多分そんな可能性をこの方々は疑っているんですよ。

マジで馬鹿じゃねえの？

そんな面倒な事を俺がする事は有り得ないんだが、いくら説明しても信じてくれないし……

だって俺はそこそ稼いでいれば満足するタイプの人間だし、何かどうしても欲しくなったら『アレ』をすればほぼ願いが叶うからだ。

とりあえずこの後どうするかが問題だ。

別に『俺TUEEEEEEE！！！！』して蹴散らしても全然構わないんだが、そもそもきつかけはただの誤解だからなあ……

何人かは山賊を相手にして大怪我をしているのもあってか、

『馬車の中の人は刺し違えてでも絶対に守る！』

という覚悟を決めた目をしているし、多分俺の意向を話すだけ無駄だと思う。

だけど下手にこれ以上怪我させても、何かの際に偶然会った時に何をされるか後が怖いから、とりあえず何もしないで逃げるのが得策か？

手加減して相手にするのも面倒だしな。

ぶつちやけ殺す方が楽なんだよね。

……まあただ逃げたと思われるのも何だし、怪我した奴等の回復ぐらいはしてやるか。

何故わざわざそんな事を俺がしたのか、その単細胞な頭でせいぜい悩むがいい！

俺は右手で幼女の身体を抱き、左手人差し指に嵌めた指輪の魔法付けんぽつかいせいと『**圈法回生**』を発動させた後に、同じく中指の指輪に魔法付とした『**加速装置**』と右手薬指の指輪に魔法付とした『**光学迷彩**』を発動させた。

魔法付与『けんぽつかいせい**圈法回生**』

ある一定範囲に存在する生命力を、敵味方関係なく回復させる効果を持つ魔法付与。

数少ない『**原種**』の一つでもある。

当然『裏鑑定』によるパチモンだ。

「な

に！」

「消

え

た！？」

「キ

ズ

が

無

い！」

馬車の護衛の人達が色々な意味で驚いているが、俺には間抜けな感じに聞こえて思わず吹き出してしまった。

魔法付与『加速装置』の効果で高速で動ける俺には、言葉が物凄くゆっくりと聞こえるのだ。

「な、ナニコレ！？ 一体何が起きているの？」

ちなみに幼女は俺に触れている御蔭で俺の魔法付与効果が及んでいるため、周囲の速度の変化に非常に驚いていた。

「五月蠅い黙れ！ 騒ぐと音源から場所がバレる！」

そう俺が鋭い声で言うと

「…………絶対後で説明して貰うからね！」

と幼女が小声で言い返してきた。

まあ幼女とはある意味『運命共同体』だからな…………

そろそろ『鑑定』と『裏鑑定』はバラしても大丈夫だろう。

『転生者』うんぬんと『アレ』だけは絶対にバラす訳にはいかないから内緒にするがな！

それから俺の体感時間で十秒くらい逃げた。

距離にすると約五キロくらいか？

つまり一秒間に五百メートルも移動したという事である。
ぶっちゃけ音速を超えています。

ちなみに距離の単位は

キロ キロ

メートル メートル

センチ センチ

ミリ ミリ

てな感じだ。

だが多分これで逃げ切れたから後は大丈夫だろう。

無修正魔法『

』や発禁魔法『

』とかを使われなければだがw

（検閲により削除）

さて、今日は野宿になりそうだな……

まったく人助けなんて面倒だよ！

今度やる時は遠距離からこっそり助けよう。

鑑定士の暴露

「……つまり貴方は『鑑定』と『裏鑑定』の能力で魔法付与を書き換える事が出来るの?」

「ああ……」

「……………頭大丈夫?」

やはり言われてしまったか……orz

まあ俺の両親達も最初は『鑑定』の能力を全然信じてくれなかったしな。

あの時はまだ使えなかったが、もし『裏鑑定』の能力が当時使えたとしても、多分いきなり俺の話を信じてはくれなかっただろう。俺だって何故こんな力を持っているのか今でも解らないしな。だからこの程度で俺は挫けないぜ!

「限りなく正常だ」

「じゃあ何か証拠を見せてよ? 何なら私の事を鑑定してみる?」

どうせ嘘なんですよ? って感じで幼女は半分俺を馬鹿にしたような態度を取ってきたので、俺はつい我慢できずに本当の事を言ってしまった。

「お前さ……『大魔王の子供達』のうちの一体だろ?」

「！」

幼女は心底驚いたような顔をしていた。

まさか言い当てられるとは思っていなかったのだろう……いい気味だ。

しかし、俺も最初幼女を『鑑定』したときは、流石に自分の能力を疑ったわ……

『大魔王の子供達』

大魔王自らが己の力の一部を与えた、という伝説を持つ自動人形達の総称である。

全部で十二体がロールアウトされ、神々をはじめとした様々な種族を数多く屠ったという伝説が数多く残っている。

それらは『魔大戦』終結までに全てが破壊された、と両親から昔話として聞いていたのだが、実は目の前の幼女がそのうちの一体だったのだ！

『鑑定』した俺自身でもなかなか信じられなかったがな。

幼女は慌てて驚いた表情を消しながら俺に聞いてきた。

「……どうしてそれを？ やはり鑑定したからなの？」

「当然。ちなみにお前の本当の名前も知っているぞ？」

滅茶苦茶有名で最初はビックリしたが……なあ？ 姫巫女アナスト」

「黙りなさい！」

ゴッ!!!!!!!!!!

幼女の怒りがそのまま魔力の暴風と化してこの場を荒れ狂った。
だがこの場以外は何の影響も無いようだ。

危なかった……

魔法付与『空間操作』と『対魔結界』によつて予め今の空間と外の空間を分断した上で魔力を遮断する結界を張っていなかったら、その無駄に膨大な魔力反応を世界中の国々に察知されて、今頃蜂の巣を突いたような大騒ぎになっていただろう。

しかしやはり馬鹿げた程の凄い魔力だ。

ここまで万全を期して準備していたのに、張っていた結界がギチギチと悲鳴を上げているからだ。

何とかギリギリセーフだったが……何とか宥めなければ！

「ちよつとマジで落ち着けて！

この結界が壊れたら色々大変なんだぞ！

こんな馬鹿デカイ魔力をどっかの国に察知されたら面倒な事になるのが解らないのか？」

「貴方が原因でしょう！

大体何故その名前を貴方が知っているの？

今の時代にその名が伝わっていない事は既に確認済みよ？」

どうやら俺の失言にかなり頭にキているようだ。

ここは素直に本当の事を伝えた方がいいだろう。

「いや俺の一族では超有名だったし。

確か……『大魔王の子供達』の中でも唯一『大魔王』に対抗出来た存在であり、『魔大戦』においては『神々』に味方したにも拘わらず、戦後はその圧倒的な力を畏れた恩知らずで性根の腐った人間達の卑怯な裏切りによって完膚無きまでに破壊された悲劇の自動人形……という伝説だったかな？」

「……そこまで知っているなんて……一体何なの貴方の一族は？」

「昔、大魔王に味方した馬鹿の末裔ですが何か？」

すると今日一番の驚いた顔の幼女がそこにあった。

ざまあみろw

まあどーでもいいが、あまり驚くと顔がギャグ顔になっちまうぞ？

「……嘘でしょ？」

『彼の末裔……』という事は、今でいう『呪われし一族』って事？でも彼等は数年前に何者かによって滅ぼされたはずよ？

それに『呪われし一族』の人達は全員が『彼』と同じく銀髪で左右の瞳の色が違ってたらしいけど、貴方は黒髪黒瞳じゃない！」

「……突然変異だ。これが原因で色々大変だったんだよ」

まあ一族出身の母親からちゃんと生まれたのに何故か黒髪だったから、何とかギリギリ受け入れて貰えたけどな！

もし母親が一族出身でなかったら、一族以外の誰かと浮気して子供を作ったと疑われても仕方無かったぞ？

まあ『呪われし一族』という偏見のせいで、一族以外から結婚相手を見つけるのは非常に難しいんだが。

「……貴方も私と……たの？」

幼女がボソッと何かを言ったのだが、良く聞こえなかったので聞き直してみた。

「え？
何？」

すると幼女は顔を真っ赤にして、

「な、何でもない！ 私はもう寝るから、寝込みを襲わないでよね」

と言いつちやがりました！

[illegible]

寝たふりをしながら幼女は思った。

（今度こそ……私は私のために願いを叶える！
でも……そのために同じ境遇の者を犠牲にするのは、果たして許される事なの？）

その答えはすぐには出そうになかった。

鑑定士の進路

翌朝俺と幼女は街から少し離れた森の中で休んでいた。

別に風邪なんてひいてませんよ？

昨日張った結界の効果で快適な環境が保たれているので大丈夫なのだ！

では何でこんな場所で休んでいるのかって？

単に疲れがまだ抜け切らないというのもあるのだが、実はまだちゃんとした逃避行先を決めていなかったから幼女と相談中なのだ。

そんな訳で木の切り株に腰掛けた俺と肩車されている幼女は、一冊の地図帳と一緒に眺めていた。

そこには俺の前世の知識にある世界地図とは似ても似つかない世界の形が詳細に描かれていた。

何と説明すれば一番ピンと来るかは解らないが、あえて言うなら、

『四つ葉のクローバーのような形』

とでも言えばいいのだろうか？

つまりこの世界の形は、東西南北にそれぞれ大陸が存在し、それぞれが隣り合わせながらもある一点で交わっているような形をしているのだ。

比較的温暖で、木々が生い茂り緑豊かな大陸……『東大陸』

北部は比較的過ごしやすい気候だが、南部は砂漠と岩のみの大陸……『南大陸』

遙か昔は神々の住む都があったのだが、大魔王が引き起こした『魔大戦』によって全てが塩の塊に成り果ててしまった大陸……『西大陸』

他の大陸に比べて遙かに強大な魔獣が跋扈し、未だに最南端部分しか開発されていない大陸……『北大陸』

そして、どの大陸の魔獣よりも強い超大型の魔獣が棲む、四つの大陸を包みこむ海……『死海』

本当はもう一つ大陸があるはずなのだが、この地図には記載していない。

まあアレだ。多分情報統制って奴だ。

こんなに詳細な地図帳を作れるのだから、当然知っていなければおかしいしな。

だがそんな事をして無駄だと思うのだが。

何故なら幾ら隠していても、いつかはその大陸……大魔王や魔族を神々が封じたとされる『魔大陸』の存在はバレてしまうだろう。

その時起きるであろう混乱を考えたら、今こうやって隠している事も全て無駄になってしまう事が偉い人達には理解出来ないのだろうか？

まあ俺にはあまり関係ない話だから別に構わないんだが。

さて話を戻そう。

俺達が今まで住んでいた街は、『東大陸』の最も北にあった。つまり、北にはぼんやりとだが『北大陸』が見えるのだ。

俺は転移先の座標を一度でも『鑑定』しており、変に転移先の座標指定を焦ったりしなれば、『空間操作』で転移出来る。

そしてその他にも、実際に見える場所ならだいたいは転移出来るのだ。

そう。今の時点で既に『北大陸』にも渡れるのだ。

絶対に渡らないがな！

北の大陸は他の大陸と比べても異常なほどの強さを持つ魔獣達が跋扈するような危険な場所なんですよ？

何が悲しくてそんな場所に行かなくてはならないの？

馬鹿なの？ 死ぬの？

まあ俺が油断しなければ負ける事は無いと思うが、出来れば安穩に暮らしたい俺には向かない場所のひとつだ。

常に緊張の連続なサバイバル生活なんて絶対に嫌だ

！

「そんな訳でこの『東大陸』で上手く引き籠り生活すれば大丈夫だろ？」

「そしてあっさり発見されて連行されるんですねわかりますw」

どこでそのテンプレを覚えたんだ？ 俺か？

全く身に覚えが無いんだが。

「でも北は無いな。南もちょっと住みにくそうだし俺は嫌だ。まあ西は最初から論外だが。」

そもそもあそこは人が住む場所じゃない。

あそこに住めって言われるなら、まだ北で俺無双していた方がいい」

「……もしかして、『西大陸』に行つた事があるの？」

「ああ。昔『師匠』とな。

あそこに隠された遺跡からは『魔大戦』で失われた『ロストテクノロジー遺失技術』、
オーバーテクノロジーそれすらも遥かに超越した『異質技術』によつて作られたモノが発掘されるから、『鑑定』や『裏鑑定』の勉強になつたし」

「その方は今も？」

聞かれるとは予想していても胸の奥が痛む。

だがこれが俺の『罪』だ。

甘んじて受けよう。

「……いや、もう亡くなつた」

「……ごめんなさい」

「いや、もう昔の話だから。

さて話を戻すが、俺は逆にこの大陸から出ない方がいいと思う。

昔から言わないか？ 『灯台元暗し』つてさ？」

「？ 『トウダイ』って何？」

「……あ。

しまった！ この世界の海は化物みたいな魔獣達の棲家だから、海路つていう概念が全く無いんだつた！

だからこそ『あの国』が一人勝ち状態なんだが。

そんな風に焦っている俺をよそに少女はブツブツ呟いていた。

「……確か昔聞いたような……どこでだったかしら？」

「そんなのは後！」

だからもう俺の案でよくないか？　な？　そうしよう？」

何だか俺の挙動不審さに、暫くの間呆れた眼差しを向けていた少女だったが、何とか誤魔化せたようだ。

「でも、ここに居たらばれないかしら？」

「後で新しい魔法付与を作れば多分大丈夫だと思う」

「……頼もしいのか、頭がおかしいのか理解に苦しむわ……
願わくば前者でありますように……」

だから俺は正常だって！

そうして色々と少女と話合った末、俺はこの『東大陸』にある数ある国々の中でも、最も南の方にある国へ行く事にした。
今の季節は秋で、これからは段々寒くなる一方だからだ。
俺は寒がりだからな。

ただ一つだけ気掛かりなのは、徐々に暑くなって来た時にどう行動するか、である。

実は俺、暑がりでもあるのだ。何この面倒臭い体質？

普通ならこの『東大陸』にある別の国に移動すればいいのだが、逃亡生活中の俺があまりあちこち移動するのは発見されるリスクが高くなるしな。

いざとなれば、さらに海を渡って『南大陸』を目指せばいい。暑いのは魔法付与で何とかなるだろうし。

まあまだ先の話だし、ある程度は追っ手を警戒しながら生活しなければならぬから、最初からそんなに急いで予定を立てるような話では無いのだが、一応考えておかなきゃな。

これからは目立たないよう隠れて生きるぜ！

……そんなふうに考えていた時期が俺にもありました。

鑑定士の仇敵

“警告！”

『カテゴリーA』に登録済みの『復讐対象01』『復讐対象03』『復讐対象08』が接近中です。”

突然俺の脳内に警告音と共にこんなメッセージが流れた。その内容に俺は驚きのあまり固まってしまった。

「？ どうしたの？」

そんな怪しい様子を見た少女が訝しんで聞いてきたが、ぶつちやけそれどころでは無かった。

別に脳内メッセージに対して驚いた訳では無い。

これは過去に『鑑定』にて得た情報と、主に生命体が放つ生命エネルギーを感知する魔法付与『気配察知』とを、魔法付与『常時接続』でリンクさせる事により、過去に一度でも『鑑定』したモノの中で僅かでも気配を持つ存在なら照合できるという新しい索敵システムであるからだ。

ちなみに『鑑定』していない場合や初見の相手の場合には、『未鑑定対象』と表示される。

てゆーか、ついさっき作ってみたばかりなんだが……いきなりこんな大物がかかってきやがりました！

マジで想定外だよ！

何故なら『カテゴリーA』とは過去に『鑑定』したモノの中でも特に危険な生命体であり、準備を整えずに遭遇するのは正直避けたい存在を登録してある分類項目だからだ。

そして『復讐対象』とは……

俺の一族を皆殺しにした奴等につけた分類項目であるのだ！

余談だが奴等についているナンバーは俺が実際に『鑑定』した順番だ。

（しかし何故今なんだ？

あれだけ探して捜してサガシ尽くしても全然見つからなかったのに……）

俺一人だけ逃げ出して、泥水を啜りながら必死に生きていた時も……

独りである事の恐怖に震えながら寝た夜も……

空腹のあまり年老いた冒険者を襲い、逆に返り討ちにあって死にかけて臨死体験をした時も……

その年老いた冒険者に治療された御蔭で辛うじて助かり、色々と事情を聞かれた結果拾われて『師匠』と呼ぶ事になり、この世界の各大陸と一緒に廻っていた時も……

『あの事故』で『師匠』が亡くなった後、色々あって例の孤児院に預けられ、様々な事件に巻き込まれたり安らかな一時を過ごしたりしていた時も……

鑑定士として独立するのを夢見て、あちこちで仕事をしていた時も……

片時も忘れた事の無い、俺の『憎き仇敵』……

だがその手がかりが何故か『鑑定』をしてもほとんど読み取れないほど何らかの手段で徹底的に抹消されており、唯一解っているのが『奴等』は『魔法監視機関』に所属しているという事のみ。

正直に言えば、復讐する事を実際は半ば以上諦めていたのだが……

マサカコンナバシヨデソウグウスルトハ！

俺の心の中がドス黒いナニカで染めあげられてゆく

！

「駄目！」

だが少女の叫びに似た声によって、俺の自意識は闇に染まる寸前で踏み止まる事が出来た。

「大丈夫？ ホントに顔色が悪いよ？」

「……ああ大丈夫だ。心配をかけて済まない。」

だが、何が駄目なんだ？ 何か都合の悪い事が起きたのか？」

すると幼女は、

「え？ …… ああ、アレね。 ちょっとした勘違いだから気にしないで！」

と焦りながら答えてきた。

「そうか？ まあ何かあったら言ってくれ。 出来るだけ力になるから……」

「あ……… ありがとう」

「あと話は変わるが、今から俺の復讐相手と遭遇しそうなんだ。 だからどこか離れた場所に隠れていてくれないか？

万が一の場合はこの辺りの地形が大きく変わるような魔法付与を使うから、巻き込まれないように避難しておいて欲しいんだが……」

「イヤ」

幼女は即答した。

「貴方だけだと殺されちゃうから、私も戦うよ。 私も戦闘に参加すれば……」

「駄目だ。 残念ながら正直今のお前では足手纏いだ……
今から来る奴等は『魔法監視機関』とかいう組織に所属しているんだが、そいつらには通常攻撃はもちろん、『原種以外の魔法攻撃』や『魔力による攻撃』すらほとんど効かないんだぞ？」

「な、なんですって！」

そつ……あの時も一族の皆が力を合わせて『奴等』を迎え撃った。やはり特殊能力を持つているために俺の一族は様々な者達から常日頃狙われていたので、それを突っぱねるために結構な数の魔法付与物を備えていたのだ。

ちなみに一族は魔法が使えなかったが、魔力は持っていた。言うまでも無く当然か。

魔力を持っていない生物は『この世界に存在出来ない』のだから……

だが、あの時『奴等』には魔法付与による攻撃が何故か全て通用しなかったのだ！

魔力による身体強化した物理攻撃も僅かに効果があっただけで、劣勢を覆す事は出来なかった。

そして……俺は震えながら隠れて見ているだけだった。

後から考えると、多分『アレ』が無意識に発動していたために助かったんだろうと思う。

俺以外は全員発見されて殺されたからな。

俺はその事をかいつまんで少女に話す。

「そんな訳で一応『原種』を持っている俺しか『奴等』に対抗出来ないんだ。

気持ち嬉しいんだが……今回は諦めてくれ」

「絶対イヤ！」

だが少女は諦めてくれなかった。

「べ、別に貴方が心配な訳じゃないんだからね！

貴方が私以外に殺されると貴方の魂が私の手に入らないのがイヤなだけだから！」

そう言いながら少女は魔法付与『魔法解除』を発動させた。

これで不意を突いて魔法付与『強制睡眠』とかで眠らせたりするのは難しくなってしまった。

こりゃ説得するのは無理か？

だが少女が危険なのは変わりない。

溜め息をついた俺は、魔法付与『四次元袋』が付加されたポケットにしまっておいた他の魔法付与されたアクセサリをひとつ引っ張り出した。

それを少女に渡す。

「え？ 何コレ？」

「複数の魔法付与をした装飾品だ。

効果は『自動回復』『気配隠蔽』『光学迷彩』『対魔結界』『対物結界』を付与してある。

ただ、その『魔法解除』を使っていると発動しないから気をつけてくれ」

「！ そんな凄いモノ使えないよ！

それにほとんどの攻撃は私の魔力による障壁と魔法付与『魔法解除』で無効化出来るし、そもそも必要無いんじゃない？」

俺は溜め息を大きく吐きながらこう言い放った。

「甘い……甘すぎる！　それで防げるとかどれだけ馬鹿なんだ？
ハッキリ言おう。俺が万が一使う魔法付与は、本来の使い手ならば……この東大陸の地表が全て吹き飛ばような威力なんだぞ？
……まあ俺は魔力が少ないからこの辺りを吹き飛ばすのがせいぜいだが」

「そ……そんな魔法付が存在する訳無いでしょ！」

「あるだろ？　少なくともお前は見た事がある筈だ。
神々や大魔王でさえ最後の最後まで使用を躊躇った発禁魔法や無修
正魔法を……」

俺は『鑑定』した魔法を『裏鑑定』で魔法付与物にする事が可能なんだぞ？」

「ま、まさか……」

幼女は顔を真っ青にしながら震えている。

まあアレを實際に間近で見たのならマジで怖いだろうが……そもそも君が説得に応じないのが悪いのだよ？

アレは『鑑定』した事を後悔した鑑定対象ベストテンに入っている
しな！

「そう……」

や

『だよ』

そう言った途端に幼女が壊れたW

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいかんべんしてくださいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいも

うおもいだしたくないですごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいあのホロビのヒカリはもうみるのはイヤ
ですごめんなさいごめんなさいみんなもえちゃってなにもなくなる
のなんかみたくないですごめんなさいごめんなさいごめんなさいご
めんなさいみんななくなっちゃうなんておもわなかったんですごめ
んなさいごめんなさいまさかあんなことになるなんてごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいみんなごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいゆるしてくださいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…
………」

結局少女は俺のOHANASHIという名の脅迫によって、離れて
くれる事になった。

何故か少女のトラウマを激しく刺激してしまったようだが大丈夫だ
ろう。

途中で色々と聞こえてきた懺悔や謝罪は多分何かの幻聴だと思う。

さて……どうやって『奴等』の相手をしますかね？

鑑定士の罠

とりあえず俺はこれからの戦闘に備えて様々な魔法付与を多重発動させる準備をする事にした。

ちなみに俺の場合は『解凍術式』を採用している。

『解凍術式』とは、あらかじめ魔法付与物に発動に必要な魔力を籠めておき、後から特定のキーワードによって発動させるという術式である。

少年漫画等でよくある、

『必殺技を使う時にいちいち叫ぶ痛いキャラクター』

の行動そのまんまであり、ある意味物凄く恥ずかしい術式でもある。

それだけでも我慢出来ないのだが、それよりもアレなのはコレは敵にわざわざ、

『今から　魔法付与を使うぞ！』

と馬鹿みたいに宣告している事と実質的に一緒であり、実際の戦闘ではこれから何をするのが完全にバレバレになってしまうという弊害があるので、俺としては本当はやりたくない。

だが、実際の戦闘中に思考のみでの多重発動は俺にはまだ上手く出来ないのだから仕方無いのだ。

……ひとつかふたつくらいの思考のみによる多重発動だったら、戦闘時や緊急時以外なら何とかなるんだがな。

本当だぞ！

さて俺は現在二十個の魔法付与物を所持している。
ちなみに幼女に渡したモノのと『四次元袋』自体は含めない。

それらのうち、現在左右の手の指全てに嵌めた指輪に施された魔法付与は、主に戦闘用に転用出来るモノばかりだ。

何故なら本来これらのモノの多重発動は『奴等』を殺すために俺が『アレ』で特別に作り上げたモノであり、例えるなら某カードゲームの特製デッキみたいなモノだからだ。

つまり完全に『奴等』対策のモノなのである。

だが勘違いしないで欲しいのだが、別にコレは『奴等』のみにしか効果が無い訳では無い。

逆に他の相手だとオーバークイルになってしまい、下手をすると肉片すら残らないから積極的には使わないだけの話だ。

俺は魔法付与物に魔力を次々と充填しながら考える。

（とりあえず『奴等』は殺しはしない。

まずは『奴等』から情報を得る事が第一だ。

個人に対する復讐に囚われて『奴等』殺してしまつては、組織の情報を得る機会を失うのは必至！

そんな愚策は馬鹿がやる事だ。

俺は馬鹿じゃない。

俺は冷静だ。

当然『鑑定』し尽くして情報を搾り取つた後に必ず殺すがな！
だがまずは奴等を無力化する事に集中しろ！

たとえ瀕死状態に陥らせてしまっても決して焦るな！

まずは逃げられないように手を打ってから回復させれば大丈夫だし、最悪一人でも生きていれば何とかなるしな……）

そして俺は『奴等』が俺の魔法付与の射程範囲領域に入ると同時に、次々と魔法付与を多重発動させた。

俺はさっきの思考によって、ある意味かなり気が楽になっていた。逆に言えば……殺さなければ何をしても大丈夫なのだから。

さて……自分達を絶対的強者だと勘違いしていた『奴等』が、弱者だと思っていた一般人に過ぎない俺によって圧倒的劣勢に立たされたと知った時、『奴等』の顔はどんな風に歪むだろうか？

アア……タノシミダナア……

森の中を足早に歩く三人は、突然同時に違和感を覚えた。

まるで入ってはいけない場所に迂闊に入ってしまったような……そんな違和感。

三人ともその場に立ち止まり、お互いに背中を向ける事で小さな三角を作り、周囲の警戒を始めた。

「おい……何かヤバくねエか？

何時の間にか誰かの仕掛けた結界内に入っちゃったようだぞ？」

背の低い太った男が他の二人に話しかける。

だが三人の中で唯一の女性に叱咤された。

「そんな事は理解してる！」

果たしてこの結界がどんな効果を持つモノか見破るのが優先事項だ。まずは全員が自分自身の能力確認を……！」

そこまで言った途端に女性の声が消された。

二人が女性を見ると、何かを叫んでいるのだが、全く聞こえない。いや、それだけでは無かった。

全ての音が消えたのだ。

太った男は心の中でひとりごちた。

（どうやらこの結界には『沈黙魔法』の効果が付与されているみてエだな……

だがコイツを仕掛けたのは馬鹿決定だわ。

俺達には原種『心送信理』しんそうしんりによって、心のみでお互いに会話出来るし、魔法も魔法付与も思考のみで多重発動出来るからな）

だが……この時点で実は彼の思考には大きな穴が存在しているのだが、全く気付いていなかった。

以前鑑定士が言っていたように、本来は『彼等』に対して魔法付与が全く効かないのだ。

それは『彼等』の身体に埋め込まれている『あるモノ』によって全ての魔法や魔力を吸収してしまうからだ。

なのに何故『沈黙魔法』が通用しているのか？

その矛盾に気付いていない時点で彼等の負けは既に決まったようなものだ。

（な……何で魔法や魔法付与が発動しないんだ！？）

男は結局、魔法や魔法付与はひとつも発動出来なかった。

だから男は焦って他の二人を見たのだが、やはり同じような状態のようであたふたしていた。

しかし逆にその様子を見た事で、男は冷静になれた。

その事によって、ようやく重要な点に気付いてしまった。

何と少しずつではあるのだが、徐々に魔力が彼の身体からも失われている事に。

いや……それだけでは無い。

この結界の中の魔力密度が限りなく低くなっているのだ！

（チツ！ 一体何なんだコレは？ 魔法とかが使えないのはコレのせいかな！

しかしただの結界魔法程度でここまで面倒なモノが構築できるのか？

『禁断の地』や特殊な迷宮の奥での話ならまだ理解できるんだが、こんな森の中でここまでの結界を敷けるなんて……）

男や他の二人は知らない。

鑑定士が『結界魔法』や『沈黙魔法』を使った訳では無い事を。

その代わりに『空間操作』と『空気操作』、『確率操作』そして『

魔力吸収』を使った事を。

それも直接『奴等』自体を対象にせず、その周りの空間のみに効果を限定した事を。

その結果、『空間操作』の効果により空間を切り離して閉鎖空間を創り上げ、『空気操作』で音声伝達を遮断し、『確率操作』により空間の魔力を一箇所に集め、『魔力吸収』でそれを全て吸収した事を。

……そして自分達の哀れな末路を。

閑話 『幼女』の驚愕

『恩人』で『怨敵』

『平凡』で『非凡』

これが今までの鑑定士に対する評価だった。

『恩人』なのは……封印されていた私を再起動してくれた事。

『怨敵』なのは……私の自由意志を押さえつけるために、妙な魔法付与によって厳しい規則を一方的に押し付けていた事。

あと『平凡』なのはあくまで外見のみの評価。

内面は『非凡』だらけだった。

いや……非凡と言うよりも『異常』と言い直した方がしっくりくるかも知れない。

まずは彼の能力である『鑑定』について。

見たモノは何でも『鑑定』出来るというある意味とんでもない能力。

その適用範囲は広く、彼から聞いた話によると他人の運命すら『鑑定』出来るらしい……

もし本当だったら恐ろしい能力だ。

だが彼にはもつと恐ろしい能力がある。

それは『裏鑑定』というさらに『異常』な能力。

でも『裏鑑定』する対象物に魔法付与がされて無ければ何の役にも立たないであろう能力。

だが、それがどんなにありふれた魔法付与だろうと、過去に『鑑定』した事がある魔法付与ならば……たとえ世界中で百に満たない『原種』級の貴重な魔法付与だろうと、それに書き換える事を可能にする能力らしい。

つまり金さえあれば市販されている魔法付与物を『原種』に書き換えられるそうだ。それも制限無く。

何その反則技？

だが彼はとぼけて話さなかったが、『裏鑑定』にはそれ以外にも秘密があるみたいだ。

例えば先日 of 落下事件の時の『アレ』……結局彼は教えてくれなかったが、あれもかなり『異常』だった。

あの時確かに彼は『裏鑑定……』と呟いていた。

そして次の瞬間には二人とも地面に立っていたのだ。

全く理解出来なかった。

まるでコマ送りされている画像が途中でゴツソリ抜け落ちたような

……

そつ……過程を吹き飛ばして結果だけが残ったような。

それも自分達に都合のいい結末へと強制的に『書き換えられた』ような奇妙な違和感……

それ以外にも『異常』は存在している。

私と彼はお互いに魂と魂が繋がっている状態なので、実は会話無しでお互いの意志疎通どころか考えている事まで解るはずなのだが……でも彼との場合は何故か相互に意志疎通すら全然出来ていない。

でも、ごくたまに流れてくる彼の内面は『異常』過ぎて私には理解出来ない。

さっきも突然物凄い怒りが私に流れ込んできて、思わず『駄目!』と言ってしまったほどだ。

あれは彼の怒りのうち、ほんの一部に過ぎないはず。
何故なら私には特殊な安全装置が働いていて、私の精神が『接続者』によって汚染されるのを防いでいるのだから……

だからその安全装置すら凌駕する彼の怒りは正直計り知れない。

だがそれらはまだ彼の『異常』さの極一部だったのだ。

それを認識したのは……さっきまで行われていた戦いを見てからだ。

いえ……あんなのは戦闘なんかじゃない!

アレはあまりに一方的過ぎる。

いきなり魔法付与名を口に出して叫んだのには驚いたと言うより少し引いてしまったが、その点を補って余りある強力な魔法付与の数々であった。

だが、その魔法付与のほとんどが私が一度は見た事のあるモノばかりであった。

不思議な事に以前見た時とは効果が全然違っていた。

でも……私には解る。

私は魔力の扱いに秀でているために、魔法付与物から出ている魔力波動の区別をある程度する事が出来るからだ。

ただ……今日使っていたモノからは以前と少しだけ違う感じも受けたので、実際は同系統の魔法付与なのかも知れないが。

それに今までの彼は基本的に思考のみで魔法付与物を発動させる『思考発動』で魔法付与を発動させていた。
そこである仮定を立ててみる。

もしかしたら魔法付与名を叫ぶ必要のある『発動』の方法を使った場合、魔法付与の威力や効果が大幅に上昇するという裏技か何かがあるのかも知れない。

それともただ単に、私が勝手にこの効果があるのなら、魔法付与名はこれと推定していただけたから、本当は別物なのかも知れないが。

彼が最初に叫んだ魔法付与『空間操作』。

確かこれは目的地に瞬間移動する魔法付与だったはずんだけど、昨日の夜も同じ魔法付与と思われるモノで強力な結界を張っていた。

それを今回はどうやら遠距離で張ったようで、彼が激しい殺意を抱いていた人達……これからは便宜上『彼等』と呼ぶ事にする……を意外なほどあっさりと包み込んでいた。一体どれだけ自由度が高いんだろう？

その次に彼が叫んだ魔法付与『空気操作』。

これは確か彼の自宅に侵入してきて、拉致された後に室内で待機していた賊の一部を帰ってくるなり一瞬で氷漬けにして殺した時の魔法付与だったはず……

あの時は持っていた魔法付与『魔法解除』がたまたま自動的に発動したために助かったようなものだ。だから私はてつきり氷結魔法の魔法付与だと思っていたのだが、今回は全然違う効果だった。

彼がそれを使った途端、結界内なのに『彼等』の声がこの場所まで聞こえてきたのだ。ただ少し経ったら音声が途切れてしまったのだが……不良品だろうか？

しかしこれは本来は離れた場所に居る者との意志疎通を可能にする魔法なのだろうか？
なのに何故『空気操作』という名称なのか意味不明だ。

次に叫んだのが魔法付与『確率操作』。

これは一番意味が解らない。

前に壁を通り抜けた時にも使っていたし、実はその前にも『空間操作』の失敗に巻き込まれて空から落下した時にも使っていたのだ。

そして今回はコレを使って結界内の魔力を一点に集めたのだ。

これは魔力を直接『視』る事が出来る私だから気が付いたのかも知れない。

そうやって集めた魔力を『魔力吸収』で吸収し、彼の魔力が回復してゆく。

しかしそれからが予想外だった。

中にいる『彼等』の持つ魔力が徐々に失われ始めたのだ。

最初はまだ魔法付与『魔力吸収』の効果が続いているのかと思ったのだが、どうやら違うようだった。

今はもう彼の魔力は一切回復していないのが『視^み』えるからだ。

そして結果として『彼等』は次々に倒れ伏した

急激に魔力を奪われたために立てなくなったのだろう。

正直こんな一方的にケリがつくとは思わなかった。

もしその時に異変に気付いていれば。

だがそれは難しかっただろう。

しかし……そこからが本当の戦闘開始だったのだ。

地面に倒れながら『彼等』は結界を破壊しようとしていたのだが、全く無駄だった。

そのうち『彼等』が地面にのたうちまわり始めた。

よく『視^み』ようと目に魔力を集中した私は、次の瞬間思わず悲鳴を上げてしまった。

この状態でも上手く認識出来ない『何か』が『彼等』を少しずつ喰らっていたからだ。

いや……私達が我に帰った時には『彼等』も徐々に人間の形を保てなくなってしまう、既に原生生物みたいなドロドロした生命体へと変化してしまっていた。

彼から動揺が少しだけだが伝わってきたので、コレは彼にとっても本当に想定外だったようだ。

すぐに我に帰り、慌てて結界を解いたみたいなのだが、その結果はさらに予想の斜め上を遥かに突き抜けて飛び去っていった。

結界を解除した途端に結界が張ってあった空間に周りの魔力が一気に流れ込んだのだ！

それは『彼等』だったモノを目掛けて集まり始め、グルグルと渦を巻き始めた。

『彼等』だったナニ力はお互いに融合しながら魔力を吸収し続け、徐々に何かを形作っていく。

そして様々な形を経て再び人型へと変化してゆき……それらは物凄い光と衝撃波を放った！

思わず彼から貰っていた魔法付与に魔力を通していたために何とか無傷で済んだが、周りは酷い有様だった。

『彼等』が居た辺りは濛々と土煙が舞い上がっている。それが消えた時、その場所は大きく抉られていた。

黒いナニカの立っている場所だけを残して……

「嘘だろ……」

彼が呻くように呟いた。

多分『鑑定』をしたのだろうが、顔が青ざめている。

「一体あれは何なの？」

「あれは……『魔属』まぞくだ」

「何言ってるのよ！ あれが魔族な訳が無いじゃない！」

すると彼は「何言ってたコイツ？」みたいな顔をしたが、すぐに何かに納得したような顔になった。

「ああ、違う違う。」

『魔法を生み出した一族』の方じゃなくて、『魔に属する者達』って言う意味だ。

しかしコイツは厄介だぞ……」

『魔属』？ 何それ？

全然意味が解らないんだけど……

鑑定士と魔属

『魔属』

幼女には『魔に属する者達』と中二っぽく説明したが、ぶっちゃけると『外宇宙からやって来た宇宙生命体』である。

姿形は『アレ』に酷似しているが……微妙に人型だ。

ちなみに『アレ』は『アレ』だ。口に出すのも憚られる使いm……黒い生命体だ。

別名『G』と言った方がよかったか？

奴等は『魔大戦』のさらに昔、この星に突如現れた。

奴等は今で言う『オーバーテクノロジー異質技術』を使い、神々や魔族をはじめとしたこの星に生きるモノ全てを滅ぼすために、わざわざ外宇宙からやってきたのだ。

何故この星を狙ったのか？

そして全てを滅ぼした後に何をしたかったのか？

それは以前『鑑定』した時も解らなかった。

逆に思考等が異質過ぎて、あやうく廃人になりかけたしな。

そう。俺は以前に『魔属』と遭った事がある。

いや……正確には滅ぼしたのを見た事がある。

もちろん俺ではなく『師匠』の力によってだが。

だがその時に『師匠』が使った魔法付与が原因で、俺は『師匠』を失ってしまったのだ。

(……あの時俺がもっと強かったなら……
いや、もう少しだけ思慮に富んでいたら『師匠』は死なずに済んだかも知れない……)

そんな事を考えて落ち込んでいると、妙にタイミングよく幼女に叱られた。

「ちょっとしつかりしてよ！ 色々考える前に『アレ』に似たアレを何とかするのが先じゃない？」

貴方はアレ……確か『魔属』だっけ？ いいわ魔族と紛らわしいからもう『アレ』で！

どうせ貴方の事だから『アレ』を『鑑定』して色々知っているんでしょ？

『アレ』は友好的な奴なの？ もし戦うとしたら何か弱点とかは無いの？」

そうだ……今は昔の事を考えている場合じゃない。

今は自分が出来る事をしつかりしなくては……

「ポケッとして本当に悪かった……今後ともあんな風になったらまた頼む」

そう幼女に謝罪すると、幼女は何故か顔を赤くしながら、

「べ、別に貴方のためじゃ無いんだから！」

と言っていたので、別に迷惑をかけた訳じゃなかったと一安心する。お互いに利用する関係は気が楽だからな。俺は解っている事を端的に話す。

「『アレ』には単純な物理攻撃や、『原種』以外の魔法攻撃はほとんど通じない。

何故なら身体のを『Gフィールド』という名前の力場で覆っていて、生半可な攻撃は全てそれに弾かれてしまうからだ」

「ふ　ん。何だか貴方のソレと似てるわね？」

幼女は俺の指輪を指差した。

それは魔法付与『要塞堅防』だった。

「当然だな。

元々コレは、当時の魔族が奴等の『Gフィールド』を研究した結果、ある方法でそれを魔法に変換して作り出したモノだからな」

「何それ……私そんなの知らないよ？」

「『魔大戦』よりさらに昔の話だから知らなくて当然だ。話を戻すぞ？

辛うじて『アレ』に通じるのが『原種』による魔法攻撃か、または『存在力』という『全ての根源に位置するエネルギー』による攻撃のみだ。

ちなみに『アレ』は、俺が二度と『鑑定』したくない相手&二度と戦いたくない相手のダブルN.O.1受賞対象でもあるぞ」

「……貴方が規格外だと知っていたけどここまでとはね……で、過去に遭遇して今も無事という事は……貴方は『アレ』を倒す

手段を知っている、もしくは持っているって事よね？」

「ああ……使ったらどうなるか解らないがな……」

「……どういう事よ？」

「その手段を使ったのが、俺じゃなくて俺の『師匠』だったんだよ。あと悠長に説明している場合じゃ無いみたいだ………来るぞ！」

俺はそこで話を打ち切り、物凄い速さで飛びながら接近してくる『アレ』に対して無駄と知りつつも魔法付与『空間操作』による空間断裂を複数ぶつけた。

それは多分回避されるか、上手く当たっても時間稼ぎにしかならないだろう。

だがこのままここに居るとモロに衝撃波の嵐に巻き込まれるし、上手く被害に遭わなくても『アレ』に捕食されるだけなのは解り切っているので、俺はすぐさま幼女を抱えて再び魔法付与『空間操作』を使って空間転移した。

俺がかなり離れた場所に転移し終えた次の瞬間、今いる場所や空気が揺れた。

いや……違う！ この空間自体が揺れたのだ！

その後に耳が痛くなるような轟音と激しい衝撃波が同時に襲いかかってきた。

「きゃあああ！」

そのせいで幼女が吹き飛ばされそうになるが、それを右手で無理矢理抱きしめながら、魔法付与『確率操作』で俺と幼女が存在を強制

的に曖昧にした。

その瞬間俺達を複数の光が貫いた。

……だが俺達にはその光による影響は無かった。

何故なら俺達は別の場所から、光に貫かれたように見えた『俺達の可能性のひとつ』を見ていたからだ。

……まあ、これは使い方が超難しい魔法付与『確率操作』の使用例のひとつだ。

元々この魔法付与は、

『使用者の運動量を観測する事によって、使用者の位置が曖昧になる』

というミクロな世界でのみ通用する量子力学の概念を、そのままマクロ世界である現実世界でも通用するように調整した実験的なモノである。

つまり俺達が動かなかった事により、運動が確定され、その結果俺達の位置が不確定になったのだ！

……あれ？ でも俺が動かなかったから位置は確定してたとも言えるんだよね？

逆説的過ぎるが……もしかして俺達の位置が確定したために俺達の運動が不確定になり、攻撃範囲から一瞬で避けられたのか？
となるとあれは、もう一人の自分達では無く単なる残像か？

……まあ結果的に無事だったんだからどっちでもいいか！

ただ一言だけ言いたい。
魔法超パネエっす！

しかし俺は一瞬忘れていた。
俺達に当たらなかつた光がどうなったのかを……

放たれた幾つかの光が遥か向こうの山を貫いた瞬間、その事を思い出した俺は、慌てて複数の魔法付与に魔力を籠めた。
光が貫いた山全体がボウツと光った次の瞬間、さっきの俺が起こした爆発など比較にならない規模の大爆発が起きた。
巨大な岩が次々と空から降ってくる。

（くそ！ 何て威力だよ！

ただの岩が音速近い速度で飛んでくるってアリなのか！？）

心の中で毒づきながら俺は魔法付与『空気操作』に加え『対物結界』と補助系の魔法付与を多重発動させた。
本当は『空間操作』を使いたかったのだが、焦っている時に慌てて発動させると高確率で失敗しやすいから断念した。

空気の壁と結界によって岩が防がれるが、それは五秒も持たなかつた。

あっさりと突破され、数多くの大岩が俺達に迫って来た。

だがその五秒間で俺は補助系魔法付与『精神安定』で心を落ち着けていた。

そして再び『空間操作』で別の場所に転移した。
転移後は念のために再び『確率操作』で存在を曖昧にするのも忘れない。

（しかし……今回はコレがあつて助かったな）

俺はこの魔法付与に思いを馳せた。

『精神安定』

これは『アレ』と似た特性を持っている相手を仮想して作っていた魔法付与だ。

普段は使わないのだが、今回はコンボの中に組み込んであつたから助かった。

しかし『魔属』はやはり半端無い強さだ。

過去に一度だけ遭遇して戦闘をした経験があるとはいえ、実際の時の俺はただの足手纏いに過ぎなかった。

あの時俺は迂闊に『魔属』を『鑑定』した結果、精神を一時的に汚染されてしまい、その事が間接的な原因となって『師匠』を失う破目になったのだ。

それが今回は俺が『師匠』の立場で、幼女があ那时的役立たずな俺のポジションにいる。

思わず笑ってしまう。

これではまるで因果応報だ。

（やはりコレを使わないと勝てなそうだな……）

俺は左手薬指にはめた指輪を見る。

これは他の魔法付与……それに『原種』よりも貴重な一品だ。

コレを使えば多分俺は死ぬ。

だが……これを使わなければ俺が勝てる可能性はほとんど無いだろう。

その魔法付与名は……禁断魔法付与『精靈登至』せいれいとじという。

鑑定士の切り札

禁断魔法付与『精霊登至』せいれいとし

これは『師匠』が死ぬ直前に俺が託された魔法付与だ。

自らの肉体の位階を無理矢理に引き上げ、『神々』に次ぐ存在である『精霊』へと魂ごと登り至らせる　　という禁断魔法が付与されている。

「……………ちよつといいか？」

俺は幼女を地面に下ろしながら話しかける。

「……………何？」

「今から俺の『切り札』を使ってみる。

で、もし万一巻き込んだら悪いから、これらを持って少し離れていてくれないか？」

そう言つて俺は幼女に『精霊登至』せいれいとし『空間操作』『四次元袋』以外に持っている魔法付与の全てと所持金を全額渡した。

「……………！　これは……………」

幼女は絶句している。

まさか俺がこんな大量に魔法付与を持っているとは流石に思っていないかったんだろう。

これだけあれば仮に買い叩かれても一生働かなくても遊んで暮らせる金になるからな。

驚く幼女を無視して俺はさらに言葉を続けた。

「あと……もし俺が『アレ』を倒せなかったら……街へ戻って孤児院長に相談して欲しい。

あのヒトなら多分何とか出来ると思うから……」

その言葉で現実復帰した幼女は俺に食ってかかってきた。

「イヤ！ 貴方死ぬつもりでしょ？ 私と一緒に戦う！

貴方がソレを使えば何とかなるんでしょ？」

俺はやっぱりとその申し出を拒否した。

「無理なのはお前だって解るだろ？

それにもし上手く行っても倒せるかどうかはやってみなきゃ解らないし、もし俺達がやられたら初期対応が遅れてしまって、下手をすれば世界が滅ぶぞ？

それに『アレ』が唯一の一体とは思えないんだ……

俺は『アレ』に物凄い似ている生物を知っているんだが……」

「………続きは？」

「『もしソレが一匹居たら三十匹は居ると思え』という俗説があつてな……」

「うわ！ 気持ち悪い！ 変な想像させないで！」

マジでビビる少女。

だが……油断したな！

俺はそつと『空間転移』を発動させたのだが、やはり少女に気付かれてしまった。

「！ あ、貴方一体何を！？」

「お前を孤児院に転移させる」

「そんなのコレで……！！……！？ 何で？ 何で発動しないの？」

どうやら『魔法解除』を発動させようとして失敗したようだ。
ニヤリ。

「残念だったな……実はさっき抱いていた時に『魔法解除』を一時的に封印しておいたんだよ。

暫くすれば元に戻るから安心しろ。……じゃあ元気でな」

「！ 何で一人で解決しようとするの？」

一旦逃げて皆と協力すればいいじゃないこのバク」

少女は最後まで言えずに転移した。

そもそも俺は湿っぽいのは嫌いなんだよ。

それに……コイツだけは俺が倒さなければならぬのだ。

何故なら……

知らなかったとはいえコイツら『魔属』を最初に現代に蘇らせてしまったのは……俺と『師匠』なのだから。

その責任は生き残った俺が何とかしなくてはならないだろう。

それに……流石に『あの姿』は知り合いに見られたくないしな。

俺は禁断魔法付与『せいれいとし精霊登至』に魔力を籠めていき……発動させた。

“ドク……ン”

すると……俺の中で何かが目覚めた。

“ドクンッ！”

そして……俺の意識はナニカによって飲み込まれブラックアウトした。

“え　ん……　え　ん……”

遠くで小さい子どもが泣いている声がする。

どこかで聞いたような声。

そこで俺の意識が漸く覚醒した。

そこはどうやら森の中らしく、今は夜の闇によって辺りは包まれている。

だが完全に真っ暗闇では無いのは、夜空に輝く二つの月の御蔭だろ

う。

(……少なくとも前世の世界では無いのだけは解った。
前は月がひとつだけだったからな。

しかしここはどこなんだ？ 何で俺はこんな場所に居るんだ？)

そう考えた途端に、頭の中に大量の記憶が一気に流れ込んできた。
そのせいで頭が酷く痛むがひたすら我慢する。

結果、何故か流れ込んできた記憶は所々が穴だらけだったが、何とか状況を把握した。

(くっ……！ 御蔭で状況は解ったが……ここがどこなのかは結局
解らず終いだ。

まさか『精霊登至』^{せいれいとし}の中にある仮想空間なんてオチは無い……よな？
それとも、もしかして『精霊登至』^{せいれいとし}の発動に失敗して取り込まれた
とか？)

だが今ここで答えを出すには、明らかに情報が足りない。

そこで俺はここがどこなのかを『鑑定』しようとしたのだが、何故
か能力が使えなかった。

使えないのは残念ながらそれだけでは無かった。当然『裏鑑定』も
使えない。

今持っている魔法付与だけは何とか使えるのが救いか？

……幼女に魔法付与物を預けなければよかったorz

唯一戦闘に使えるのが『空間操作』だけかよ……まあ無いよりはマ
シだけど。

ただ、何故か魔力を普段より使わないと発動しないから、あまり多
用は出来そうに無いが。

後は自分の魔力を纏って身体能力をわずかに引き上げるくらいか？
とりあえず自分の能力の把握をこれくらいで切り上げて、次に採るべき行動を考えるが……

（でもコレってもしかしくなくても最初から選択肢がひとつしか無い
だろ？

さっきから聞こえ続ける子どもの泣き声がウザいし……）

溜め息をついた後、俺は『声』が聞こえる方向に向かってみる。

しかし暗い森の中を一人で歩くのはマジで怖い。

いくら月明かりで周りがぼんやり見えると言っても、さっきから子どもの泣き声と虫の鳴き声しかないのはシユール過ぎて逆に怖いのだ。

もし今いきなり誰かに『ワッ！』とか脅かされたら、確実に小便を漏らす自信がある。

……あと魔法付与があまり使えない今の状況で、魔物どころか狼とかでも遭うのは勘弁して欲しい、と祈りながら、出来るだけ大きな音を立てないように努力しながら歩く。

そんな恐怖と戦いながらまるで苦行のように歩き続けること十数分。
漸く俺は大きな一本杉がある小さな広場に出る事が出来た。

（……あれ？　ここは……）

俺の頭の隅を何かが横切ったのだが、残念ながらその感覚はすぐに消えてしまった。

気持ちを切り替えた俺はその場所で耳を澄ますと、どうやら泣き声はその一本杉の上の方から聞こえてくるようだった。

ちなみに、ここまで近付いて漸く解ったのだが、どうやらそれは少年の泣き声らしかった。

「お　い！　誰かそこにいるのか？」

俺は木の上で泣いている誰かに声をかけたのだが、次の瞬間『ぴたっ』と泣き声が止んでしまった。
辺りはシーンと静寂に包まれた。

……もしかして、子どもの泣き声じゃ無くて……魔物の誘い声だったとか？

そう考えながら警戒していると、上から小さな声が聞こえてきた。

「……だれですか？」

どうやら言葉は通じるらしい。

だが、やはりどこかで聞いたような……

「……あの……どうしましたか？」

その声に該当しそうな奴を思い浮かべていると、再び上の方から声がかけられた。

急に黙ってしまったから心配になったのだろう。

「ああ、悪い。

旅をしているんだがちょっと道に迷ってね。

出来ればどこか泊まれる場所に案内してくれると助かるんだが……」

「……………」

「駄目か？」

「……駄目じゃないんですが……実はここから降りれなくなっちゃいます……」

（お前は馬鹿猫か！

まあ多分下を見て降りるのが怖くなったんだろうが……

……あれ？　なんだっけこの感じ？　何かを忘れているようなこの奇妙な感覚は？）

そう俺は思いながらも助けてあげる事にした。

「ちょっと待ってろ」

俺は『空間操作』を使って声の主を地上に引き寄せた。

そしてその人物の容姿を見て……俺は激しい驚きと同時に納得していた。

今までの違和感の正体が解ったから。

声の主は少年だった。

金髪で黒目の少年だったが、俺には非常に見覚えがある顔だった。

多分その金髪は無理矢理脱色したのだろう……毛根に近い部分から再び色が黒くなっていて、前世でいうところの『プリン頭』になっていた。

そう……その少年は過去の俺にそっくりだったのだ！
なんでやねん！

鑑定士と少年

（うん。どう見ても外見は昔の俺だ。もしかしてドッペルゲンガーか？

うわゝモロに第一級死亡フラグじゃん！

いや待て！ これはきつと孔明の畏に違いない！

…… ってそれもある意味死亡フラグじゃん！

だがこれは一体何の冗談だ？ まさか過去に戻った訳じゃないだろうし……

しかしこの広場はよく見ると『あの広場』だぞ？

何だ？ 何が起こしたんだ？ 全然理解出来ん！

もしかしたら何かの精神攻撃か？

その可能性も否定出来ないから、何らかの対応はしておくべきか？

俺はセルフ突っ込みにより何とか立ち直りつつ、精神攻撃に対抗するために『ある事』をしておく。

それとほぼ同時に過去の俺に似た少年（以後は『少年』で統一する）も再起動したようだ。

どうやらさつき俺が地上まで強制的に転移したせいで、驚きの余り固まっていたらしい。

「なななな……」

「ん？ 何その『なななな』って？」

「！ 違います！ 僕は『何ですか今のは？』って聞きたかったんです！」

再起動した後の少年は最初に話した時の大人しそうな印象と違って、鼻息が荒くて激しくウザかった。

（俺ってこんなウザイ奴だったか？ それに……俺にはこんな出会いの記憶は無いんだが？

いや……そもそも何で俺はこの少年を俺だって思っているんだ？
ここが過去だって決まっている訳じゃないのに……
ただ単に物凄く似ているだけじゃないのか？）

そう。ここが過去だという証拠は何も無いのだ。
まあ逆に言えば『過去ではない』という証拠も無いのだが……

確かに俺はここで昔、木に登って泣いた記憶を持っている。
そう……『アイツ』に認めて欲しかったからこの木に登ったのだ。
結局それは叶う事が無かったのだが……

だが、明らかに記憶と違う点がある。
俺は『木から落ちて死にかけていたのを見知らぬ旅人に助けられた』
のだ。
決して『何かの魔法付与で助けられた』訳では無い。

（一体何だろうこの情報の齟齬は？ もしかして……）

「ちょっと聞いていますか？」

少年の声で思考の海から戻ってしまった俺は、少しムカツとしてしまっていた。

もう少して何かを掴めそうだったのに、それはするりと逃げてしま

ったからだ。

何だかもう真面目に相手をするのが面倒になった俺は、適当に答える事にした。

「ああ聞いてるよ。これはただの魔法付与だよ？」

「嘘です！ 僕は今まで生きてきて、そんな不思議な効果を持つ魔法付与なんて見た事も聞いた事無いですもん！」

だが少年はさらに噛み付いてきました！マジウゼエ

！

まあ見た事も聞いた事も無いのは当然だ。

以前にも幼女に少しだけ言った事があるが、これは俺が新しく作り出した魔法付与だからだ。

……そう言えば『そもそも魔法とは何か？』なんて、今の俺には当たり前過ぎていちいち考えた事すら無かったが、いい機会だし改めて考えてみるか。

これから俺が独白する事は、あくまでも俺が『鑑定』した数々の結果から導き出した推論に過ぎないのをまずは考慮して欲しい。

何故なら『鑑定』しても情報の欠落の度合いによっては、正確に読み取れない場合も多々存在するのだ。

さて……結論から言つと『魔法』とは世界に存在する様々な概念を抽出したモノである。

その方法を最初に発見したのは現在最も支持されている学説でもある『神々が生み出したモノ』では決して無い。

実は魔族が発見したのが真実なのだ。
そちら関係の話は長くなるからまた今度。

そして俺の魔法付与の効果はこの世界ではまだ発見されていない『新しい概念』を使った今までに無い新しい魔法付与なのである。
だからこの世界の者達にその概念が理解出来ないのもある意味当然である。

ただ……『新しい概念』を具現化するために、既存の概念である『魔法付与』という枠の中で構築しているため、魔法付与の持つ様々な弱点も同時に取り込んでしまっているのだが。

具体的には、

- ・魔力が枯渇した場合には使用出来ない。
 - ・『魔法解除』等のキャンセル系によって解除されてしまう。
- とかだが、その点にさえ気をつければかなり便利だからな。

閑話休題。

「ん？ 君はこの世の中にある全ての魔法付与を知っているとでも言うのかい？」

「それは……確かに知りませんが……」

「じゃあ何で俺の言葉を嘘だと断定したんだ？
それに否定するならば、最低でも全ての魔法付与について自分で調べる程度はしてから反論して欲しいな？
後さ……仮にも助けて貰った相手に対して、君の態度は失礼じゃないか？」

君が最初にすべき事は何だった？

まずは俺への感謝の言葉と、自分の名前を名乗る事じゃないのか？」

少年は黙り込んでしまった。

俺的には面倒臭そうな奴と関わり合いたくないので、宿の場所だけ聞いて別れる事にした。

それに外見だけとはいえ自分の子供時代の姿に似ている奴にSEK KYOUするのも、何だか変な気分だしな。

……当然だが孤児院長のアレとは別だからな？

流石に向日葵の花を誘拐犯達の尻に……イヤナンデモアリマセンヨ？
ボクハミテイマセンカラ……タスケテクダサイ！

アッ

！

「あの……どうかしましたか？

急に顔色が悪くなりましたけど……」

「ん？ いや何でもないよ？

とりあえず今夜泊まれる場所だけ教えてくれないか？

こう見えても結構疲れていて、一刻も早く休みたいんだ」

疲れたのは主に E K Y Uの回想シーンですがね……

ん？ 何だそれは？

『ズキンッ！』

痛ッ！ 頭が痛い！ 何かを思い出そうとする

あれ？ 何を考えていたんだっけ？

そうそう……確か泊まる場所を聞いていたんだよね？

「……教えてもいいですけど、多分無理ですよ？

僕の村は排他的なんで、運が良くても村にある納屋でしか泊まれませんし」

少年はボソツと答えてきた。

どうやら過去の俺に似ているだけあって、周囲の状況もかなり似ているようだ。

（……あゝ俺の住んでいた村は隠れ里だったから、もし同じような状況だと確かに無理かも知れん。

……最悪でも納屋に泊まれればいいなあ……村の中なら獣とかに襲われないだろうし）

「……もし嫌でなければウチに泊まりませんか？

助けて貰った恩もありますし……それにさっきは失礼な事をしてしまいましたし……」

悩んでいる俺に少年は声をかけてきた。

「いいのかい？」

「一応親に聞いてみないと解りませんが、僕の命の恩人と言えば大丈夫だと思います。

あと……さっきはすみませんでした！

碌に知らないくせに、魔法付与の話が大好きなもので……ごめんなさい」

少年は突如謝ってきた。

あれ？俺って何かされたっけ？

全然解らないのだが、真剣に謝ってるから可哀相だし……許してあげよう。

「いや、何だかよくわからないんだが別にもう構わないよ？……じゃあお願いしようかな？」

そう言う少年はホッとした顔をした。

「あ。申し遅れました！

僕の名前は定士^{さだし}……鑑定士^{かがみさだし}って言います。

貴方の名前は？」

……ちよつと待て！ それって俺の本名と同じじゃん！

て事は……ここはやつぱり過去の世界なのか？

それとも平行世界とか？

いや、それは後で考える事にしよう。

とりあえず今は本名を名乗るのはまずいから偽名を言わなきゃな。

……『師匠』、貴方の名前をお借りします！

「……アラン。アラン。スミシーだ。
よろしく、定士^{さだし}」

鑑定士の提案

少年は鑑定士^{かがみさたし}と俺に名乗った。
これは由々しき問題である。

何故ならそれは、俺が自らの過去と決別するために棄て去った本名であるからだ。
ちなみに普段俺が名乗っている偽名は……別にここで出さなくてもいいか。

で。結論から言えば、ここはどうやら『過去』もしくは『平行世界』のようだ。

大穴で精神攻撃による幻覚、または『精霊登至^{せいれいとじ}』に吸収もしくはその内的宇宙に取り込まれた可能性もあるから断言は出来ないが……

だがここが『過去』か『平行世界』かによって、今後俺が取るべき対応は変わってくる。

もし『平行世界』なら、俺が何をしようが俺の存在には影響が無い。その世界に存在する俺と今の俺の間には時間軸によって繋がる因果関係は最初から存在しないからだ。

あくまで『直接的には』という但し書きが付くのだが、いちいち間接的云々と考えていたら何も出来なくなってしまう。

いや、逆に何もしない事が悪い結果を引き寄せる可能性も無きにしもあらずなのだ。

しかし……もしここが今の俺と繋がる『過去』だった場合は話が違
う。

俺の行動ひとつで『未来』が大きく変化してしまう危険性が非常に
高くなるからだ。

もし『過去』を変えてしまったら……本来なら『未来』に存在する
はずの俺……もしくは最悪の場合は俺の未来ごと消えてしまう可能
性がある。

いや、もしかしたら……実はこの可能性が地味に一番高いのだが、
もう『木から落ちて大怪我をした』という過去を変えてしまったた
めに歴史の流れが枝別れをしてしまい、この世界は今まさに平行世
界化しつつあるのかも知れないのだ。

そうなると俺の存在は……

……

……

……

そうか……そういう事か。

漸く俺は『精霊登至^{せいれいとし}』の原理が解ってきた。

あくまでも予想に過ぎないが多分これが正解だろう。

過去を書き換える事で、現在の俺という存在を『別の平行世界
の存在』へと書き換える

なるほど……そうなるにあの時の『師匠』はその書き換え自体は成功したが、書き換えられた結果が『あんな恐ろしい姿』を持つ存在になったって事が……

……待てよ？

そうすると、下手をすれば滅茶苦茶強い存在だけどベースがバツタとか、触手の塊みたいなキモい外見になる可能性もあるって事か？

……バツタは有りだが触手だったなら自殺モノだな。

まあどっちにしろ既に『精霊登至^{せいれいとじ}』は起動させてしまっている。
結果がどうなるかは考えるだけ無駄な気がしてきた。

だがいずれにせよ俺は既に記憶と違う流れに乗ってしまったようだ。
実は俺が『鑑定』能力に目覚めたのは、確か『ついさっき』の場面が深く関わっていたはずなのだから。

俺はあの日、唯一普通に接してくれた『アイツ』と些細な喧嘩をした。

そして彼女と無謀な賭けをしてしまった。

あの広場にある一番高い木の天辺に登れたら俺の勝ち。

登れなかったら『アイツ』の勝ち。

そして賭けは俺が勝った。

だが俺は木から降りようとしてつい下を見てしまい、動けなくなってしまったのだ。

泣き喚く俺を励まし続けた彼女も、日が沈むと同時に帰ってしまった

た。

後で『鑑定』した結果によると、彼女は誰か助けを呼びに村へ戻ったまでは解っている。

……だが彼女はそのまま行方不明になってしまったのだ。

そんな事を知らなかった当時の俺は……彼女に裏切られて帰られてしまったと思い込み泣いていたのだ。
そして俺は木からうっかり足を滑らせて……

……………！

……そうだ。

ここが『平行世界』だろうが『過去』だろうが何だろうが、今なら『アイツ』を救えるかも知れない！

もし『過去』だった場合は『アイツ』を助け事で未来が少しだけ変わる可能性が無くは無いのだが、俺自身に直接影響がある行為では無いから大丈夫だろう……多分。

俺は少年に聞いてみた。

「ちょっと質問があるんだがいいかな？」

「何ですか？」

「君は一人である場所に居たんじゃ無いよな？」

「……何でそれを知っているんですか？」

少年は訝りながら聞いてきたが、予想通りだったので俺は少年の反応を無視してさらに質問を続けた。

「『彼女』はどのくらい前に村に帰ったんだ？」

「な……何で知っているんですか？」

「いいから答えろ！」

俺はマジギレしながら少年に掴みかかった。

「く……苦し……い」

「早く言うんだ！ 彼女の命がかかっているんだぞ！」

「え……？」

「早く！」

「つ……ついさっきです」

（じゃあ俺と入れ違いになったのか？ だがどうする？

今の俺には『鑑定』も『裏鑑定』も使えない。だから彼女の足取りを追う手段が無い。

せめて『鑑定』だけでも今使えたなら……！（

だがそこである考えが閃いた！

俺が少年に『アレ』を施す事で、少年が本来得るはずだった『鑑定』能力を得る事が出来るようになるかも知れないからだ。さらに上手く行けば現時点で『裏鑑定』も使えるようになる可能性が高い。

……あくまでも失敗しなければだが。

俺は少年の意志を確認する。

「少年よ……彼女を助けたいか？」

「え？」

「詳しい理由は後ですが、彼女は今危機に瀕してしている！
そしてお前には彼女を救う力が秘められているんだ！

だがそれを無理矢理起こすと、将来色々な副作用や、その力のせいで周りの人間の信頼を失うかも知れない……だが彼女は確実に助かるはずだ。

お前はとうしたい？」

「ぼ……僕は……」

少年は迷っていた。それは当然だ。

もしここが『過去』であるなら、俺は少年の迷いを一番理解出来る。ただでさえ髪と瞳の色が違っただけで一族のほとんどから無視されているのだ。

だが……

「もう彼女に会えなくなってもいいのか？」

俺の最後に言った言葉が少年の背中を押したようだ。
一族の中で数少ない俺の『友達』だった少女。

彼女が居なくなるのは少年には耐えられないだろう……

「……どうすれば助けられますか？」

少年は何かを決意した真剣な瞳で俺を見る。

「いいんだな？　もしかしたら彼女にも嫌われるかもしれないんだぞ？」

だが少年は。

「……『アイツ』が生きていてくれれば、僕は幸せなんです」

そう笑顔で答えてきた。

（いい漢じゃねえか……って俺ってこんなに格好いい奴だったわけ？
一体誰だコイツ！　絶対俺じゃねエよ！
もうコイツは過去の俺じゃなくて別人でいいよ！）

そんな近親憎悪じみた逆恨みを抱きながら、俺は一日に三回しか使えない『アレ』を少年に使いながら答えた。

「解った……じゃあ、ちよいと痛いが我慢しろよ？」

「？　それって……！？　痛い！　ちよつま！　痛い痛い痛い！」

この時ちょっとした嫉妬から本気で『アレ』を使っ
たのは内緒だぞ！
お兄さんとの約束だ！

鑑定士による魔改造

少年はあまりの痛みに獣のような悲鳴を上げ続けた。

「あががあ……ぐうううおあああ
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「あ！　うるさい！　あともう少して終わるから我慢しろ！　
お前、男だろ？　キン　マツいてるんだろ？　
男がこの程度の痛みでいちいちギヤーギヤー喚くな！」

俺はマジギレしてキツい言葉を言い放ちながらも少年に『アレ』を
 施し続けた。
 以降その少年は痛みに耐えながら俺を睨みつけているが、特に気に
 もならない。
 どんなに他人が痛かろうが、俺自身が痛みを実際に感じる訳じゃな
 いからな。

こう率直に言くと『他人の痛みが解らない冷血な人間』と勘違いされる事が多いのだが、別にそう思われようが俺は全然構わない。

何故なら、痛みという概念はそれを受ける側によって定義が劇的に変化をするという側面があり、一概に『ポイントのダメージ!』のように定量化する事は不可能に近いからだ。

中には痛みが快感になるMな方々も存在するしな。

つまり他人の痛みを『共感』する事自体は出来るが、実はそれは単なる共有幻想に過ぎず、その正体は自分の痛みに関する経験によって大きく左右されるという酷く曖昧なモノなのである。

もつと簡単に言えば、最初から『他人の痛みを解る人間なんてこの世に存在しない』のに、自分の事を棚に上げて非難するのは意味が無いという話だ。

ちなみに人間には本当に多種多様なタイプが存在し、指先をちよつと切っただけで死ぬ死ぬ騒ぐ根性無しも居れば、瀕死に近いダメージを受けていても、実際に倒れるまで平気な顔を続ける剛の者も存在する。

その違いは痛みに対する神経反応の差（＝敏感または鈍感）というのも存外に大きいが、やはり個人的には『死という概念への抵抗』が一番大きいと思う。

その詳細な話をするとな長くなるのでまた今度。

そんな訳で、たとえこの少年が俺の過去の存在であろうがなかろうが、その主義を変えるつもりは毛頭無い。

まあ俺は別に好き好んで他人を攻撃して悦楽を感じるような変態では無いが、俺の中ではこの痛みは少年が力を得るために必要な行為だと認識しているからだ。

覚悟の上での痛みなのに、この程度で音を上げるなんて言語道断である。

あくまで俺の経験談だが、この程度の痛みなど将来は嫌になるほど経験するはめになるのだから、早く慣れろと逆に罵倒したいくらいだ。

少年に対して事前の説明が少々足りなかった気もしなくは無いのだ

が、多分気のせいだろう。

ところで何故俺自身に『アレ』をして『鑑定』や『裏鑑定』を取り戻さなかったのか？

確かにそっちの方が今から起きるであろう事態を上手く収めるには楽かも知れない。

だがそうしなかった理由が幾つか存在するのだ。

思い出して欲しい。

俺は今日もう既に一回『アレ』を使っている事を……

そう。例の『索敵システム』を作った時に実は使っていたのだ。

（『鑑定士の仇敵』を参照）

もしこうなると解っていたら使わなかったのに……orz

だがもしあの時に『アレ』を使わなかった場合、確実に『奴等』と鉢合わせをしてしまっていただろう。

そして最初から向こうが俺の正体を知っていたら……俺はサーチアンドデストロイされていたかも知れなかったから、やむを得なかったと無理矢理納得する事にする。

そんな訳で今日は『アレ』をあと二回しか使えない。

そうなると色々今後の対応を考えると、どうしても最初に少年の方を優先しなければならないのだ。

その理由は三つある。

最初の理由は、今この少年が能力を得られなかったら、今から起きる何らかのイベントであっさり死んでしまう可能性があるからだ。

本来の歴史ではさつき少年が登っていた木から足を滑らせて落下し、頭を強打した結果『鑑定』能力が目覚めたのだが、それを俺が邪魔してしまった事が原因でそのイベントフラグは折れてしまったようなのだ。

その代わりに今回のミッション『誘拐された少女の奪還』のフラグが立ってしまった訳なんだが。

ちなみに前の『生死の境目を彷徨う』イベントよりも今回新たに発生してしまったミッションの方が遥かに難易度が高い。だが最低でも『鑑定』、出来れば『裏鑑定』が使えれば段違いで楽になるだろう。

次の理由は、もしかしたら今の俺自身に『アレ』を使っても無駄な結果に終わる可能性が非常に高いからだ。

まずあまりに不確定な事象が同時多発的に起きてしまい、複数の組み合わせが発生したせいで正しい『ルート』が確定出来ないのだ。

そしてここからが重要なのだが……『アレ』は実は最低でも『原因』と『結果』が認識出来ないと使用不可能なのだ。

何故なら『アレ』は『原因』を書き換える事により『結果』を改竄するモノだから。

つまり、俺がここに居る理由は確定出来る。

『精霊登至』せいれいとしを使ったからだ。

その状態で『様々な能力が使えない』という『結果』を改竄したらどうなるだろうか？

下手をすれば『精霊登至^{せいれいとじ}』を使う直前にまで時間を戻されてしまう可能性すらあるのだ！

あくまで可能性に過ぎないのだが、世界は意外と出鱈目^{ランダム}だから油断は出来ない。

『確率操作』さえあればその心配は無いのだが……後悔しても遅いか。

そして最後の理由は『アレ』を最後の切り札として一回分は残しておきたいからだ。

大抵の敵なら魔法付与『空間存在』や、最悪『四次元袋』を応用して敵の身体を反転させて裏返しにするというグロ技を使う事も可能だ。

だが万が一『魔属』みたいな魔法付与を無効化させるようなバケモノが相手だと基本的に魔法付与は役に立たない。

それにそういう敵とはやはり『アレ』とも相性が悪いので、結局は逃げる事にしか使えないのだがそれでも確実に逃げられるからだ。

……どうやらまだ『届かない』ようだ。

その間暇だから俺が前々からチラツと言っていた『アレ』について考察してみる。

『アレ』とは簡単に言うと、『現実そのものを改竄する行為』である。

ただし制限は先に挙げた他にも幾つかあって、必ずしも万能では無い。

まず事前に改竄対象を『鑑定』の各スキルのうち最後に修得する『詳細鑑定』で、その改竄対象の『概念』^{ソース}を予め入手する必要がある。

そして……

[illegible]

そんな事を考えているうちに、漸く『届いた』感じがした。

悠長にこんな事を考えている場合では無い。

俺はその感覚を『アレ』で『掴み』、その何か得体の知れないモノを少年の身体の奥から『引きずり出した』。

↙

!!!!!!

[illegible]

少年は声無き悲鳴を上げた後に気絶した。

まあ当然だ。ある意味『魂』を無理矢理鍛え直したようなモノだからな。

さて……上手く行っていればいいが。

とりあえず確認するのに少年を叩き起こすか。

鑑定士の嫉妬

（どうしてこうなった？）

俺は自問自答するが、導き出せた答えは『自業自得』であった。要するに俺は少々はっちゃけ過ぎてしまい、『今の俺へと繋がっている本来のルート』と『今の少年が繋がってしまった、俺の至ったかも知れない可能性のルート』を何かの拍子で間違えてしまったのだ。

その御蔭で再び『鑑定』と『裏鑑定』の能力が戻ってきたのは嬉しいのだが、何かが釈然としない。

（しかし……何でこんなクソガキにあんなに羨ま……強力な能力が発現したんだ？

その上今回のミッションには全然役に立たなそうだし！ クソツ！
何この格差社会？

やっぱり神様なんて居ないんや……平等とか公平なんていう概念は幻想に過ぎなかったんや！）

実は『鑑定』した結果、少年に発現した能力は別名『NADEPO』とも呼ばれる恐るべき能力だったのだ！

前世の極一部の大きなお友達が渴望してやまなかった能力であり、一般には『魅了魔手』とも呼ばれる伝説級の能力である。

まさか……俺に『NIKOPPO』に至る可能性があるとは思わなかった……

ちなみに五感を通じて相手を魅了するモノは以下の五つである。

視覚 - 『NIKOPPO』 - 『魅了魔眼』

触覚 - 『NADEPO』 - 『魅了魔手』

聴覚 - 『KAKOPPO』 - 『魅了魔昔』

嗅覚 - 『NIOIPO』 - 『魅了魔臭』

味覚 - 『PEROPPO』 - 『魅了魔味』

しかし参った……これは新たな死亡フラグではないだろうか？

この五つの能力はその洗脳以上の効果から危険視された結果、過去に神々によって発現禁止された能力のはず。

だが、どうやら『アレ』のやり過ぎによって至ってしまったようだ。もしこれを目覚めさせたのが俺だとバレたら、俺自身が色々と危険に晒されるのは確定だろうし。

なかなか『届かない』と思ったらコレだよ！

まあ流石に『アレ』は発現しなかったみたいだが……もしクソガキに発現していたら、俺はあまりの不公平さに対し逆切れしていたかも知れない。

だが俺は少年の発現した能力に対して内心嫉妬の炎を燃やしていたのと同時に、心の底の方では今回の結果に安堵するという相反する気持ちを抱えていた。

何故なら少年にこの『能力』が発現したのとはほぼ同時に、俺の能力……『鑑定』と『裏鑑定』が復活したのが大きいからだろう。

これは俺が既に少年と別の存在になった事を意味する。

多分俺がさっきまで『能力』が使えなかった理由は、同位存在である俺と少年が同時に同時間軸に存在したために、『能力』の所有権が曖昧になった結果、能力の所有者が一時的に不確定になったからだと推測されるからだ。

だがこれで『アイツ』を救う手段が一応整った。

早く『鑑定』して探さなければ……

(……でもこれじゃまだ最初と同じ人間のままだよな俺？

『精霊』って確か、精神のみで現実世界に干渉し、あらゆる物理法則から解き放たれた存在だったはず……)

そう。これでは単に平行世界をひとつ作り出しただけであり、俺自体には何の影響も無い。

まだ肉体を持っているし、魔力も増えたような感じが全くしない。もしこの状態のまま元の時間軸に戻されたら多分すぐに殺されてしまっただろう。

『せいれいとし精霊登至』とさっきまで少年に施していた『アレ』は非常に似ているが、さすがに『アレ』では存在を書き換えるまでは出来ないしな……

あ……あと俺もいい加減に『アレ』をアレ呼ばわりは止めて、ちゃんと『ARE』と呼ぶか……

『アレ』とは俺が使っている様々なチートくさい能力である『鑑定』や『裏鑑定』を遥かに超える例の技術である。

元々『神々』や『魔族』からは『ARE』と呼称されていたモノなので、俺もそう呼んでいるのだ。

どうやらこんな綴りの頭文字らしいが、マジで『アレ』だよな……

A k a s h i c
R e c o r d s
E m u l a t o r

この世界のどこかにあると言われている『アカシクレコード』……それを擬似的に模倣するという『エミュレータ』能力こそ、俺の真の能力……らしい。

つまり、

『あらゆる能力をフルスペックで使えますよ？　ただし一日三回までですがね？』

って訳だ。

うん。『なにその反則技？』って感じだね。

俺もそう思うよ……

でもさ、そもそも他の能力……例えば『鑑定』だって謎の能力だし。ステータス画面が出る理由だって考えてみりや変だし、『裏鑑定』なんて下手すりや永久機関すら作れんじゃね？

ちなみにこの『ARE』が進化すれば、通称『ARMS』という『最終究極能力』になるらしいのだが……

それにはちよつと面倒な過程を経なければならぬし、そうなった

らなつたで色々面倒な事になると予想できるので、積極的に至ろうとは考えていないがな。

さて『精霊』とかの話に戻そうか？

前に遺跡発掘をした時に『鑑定』した際に見えた感じだと、『精霊』とは例えるなら『意志のある魔法』とも言えいいのだろうか？

まあ『魔法』はそもそも『魔族』が人間に好意的な『精霊』に協力して貰って、共同で研究した結果辿り着いた結果だから似ているのは当然なのだが。

ただ『魔法』に比べて『精霊』は遥かに規格外過ぎる。

『魔法』には『魔力』が必要なのだが、『精霊』の振るう力には魔力など必要無い。

様々なモノの『存在力』を直接『精霊』は吸収出来るからだ。

たとえそれが『魔属』の身体を構成する物質であつても。

『存在力』を奪われたモノはこの世界に存在出来なくなる。

それだけが『魔属』に対する俺の唯一の勝機だったのだが……マズイよな。

そしてここからが重要な話になるのだが……実は『精霊』には2種類あるのだ。

元々『人間だった』が修行等によって『精霊』に至った場合と、自然物が長い年月をかけて『精霊』に至った場合がある。

そう……人間の場合は何も『せいれいとし精霊登至』のみが『精霊』に至る唯一の方法では無いのだ。

だが人間が『精霊』になるには他の方法を用いた場合、文字通りその生命のみならず膨大な時間をかけて挑まなくてはならず、それでも必ず『精霊』になれる確証は必ずしも無いという厳しい条件なのである。

だから手っ取り早く『精霊登至^{せいれいとじ}』を使つたのに、結局無駄足か。

それとも……ほかに何か達成条件でもあるのだろうか？

例えば『死んだ人が実は死んでいなかった』とか……

……

………

やっぱそれしか無いよな……

この時点から約半月後に俺の一族は皆殺しにされたのだから。

その切っ掛けこそ、『アイツ』が居なくなつた事件が鍵だと俺は思っている。

さて……そろそろ『鑑定』を開始しますか！

閑話 『世界』の『沙双（しゃそう）』から

ここは……鑑定士が居る『世界』から一番近くて、そして一番遠い『世界』。

その『世界』は何と二本の物凄く巨大な樹『沙羅双樹』……通称『沙双』によって構成されており、その双樹には様々な姿をした『化身神』が住んでいる。

その『化身神』が集い、様々な議論を交わす場所『冠無官無』。その名前には、『ここでは身分や役職に関わらず、対等に議論を交わす事が出来る』という意味が込められている。そこでは、今まさに『ある事態』に関する議論が白熱していた。

「では今回の件を傍観すると貴方達はおっしゃるのですな？」

一見すると巨大なネズミのような『化身神』が文字通り『吠えた』。その威力によって一瞬『冠無官無』自体も震えるが、相対していた美しい女性の姿をした『化身神』は、まるで何事も無かったかのようにな涼しげに答えた。

「はい。『ARE』を手に入れた経緯が何であれ、使う使わないは

その『世界』に住む者全ての意思決定によるもの……それがたとえ意識してだろうが無意識でだろうが、全ての者が決定した意思はその『世界』の意思と言っても過言では無いはず……
ならば我々がとやかく言うモノでは無い、というのが当方『委因界』の総意です」

『冠無官無』に居る様々な姿をした『化身神』たちは、それを聞いて騒然とするが、議論の進行役である『司界』の、「静粛に」の一言によって『冠無官無』内は水を打ったかのような静けさに包まれた。

それを確認してから巨大ネズミ（仮）が反論した。

「我々『抑止界』としては反対だ！

我々は今回の事態を絶対に看過出来ないと宣言する！

『ARE』を使う『彼』は殺害し、『ARMS』へと至る可能性を潰さなくてはならない！

あのまま『ARE』を使い続ければ、『ARMS』はおるか……いずれあの『世界艦』にすら辿り着く可能性を秘めているのだぞ？

現存するどの『世界艦』も世界の壁すら越えてしまうシロモノばかり……もしたただの人間がそんな力を手にいれたら、どうなるかは明白だ。

そうなった場合、『委因界』としては一体どう責任を取るつもり……」

だが糾弾していた巨大ネズミ（仮）は急に寒気を覚え、それ以上発言を続ける事が出来ずにいた。

（な……何だこの恐怖感は……一体誰が……）

そして目の前に居る美女（仮）と目が合った瞬間に理解した。

（俺はコイツを怒らせてしまった！）と。
美女（仮）は多少言葉遣いを荒くしながらも理路整然と反論してきた。

「お前等は一体何を言っているんですか？

何故我々『委因界』が今回の件から派生する事態が起きた場合の責任を一方的に取らねばならないのか理解出来ませんが。

元々はお前等が中途半端な力しか使えないくせに、大した準備もせずに『彼等』のステータスから『魔法』を安易に削除したからでしょうが！

だがそのせいで『彼等』は逆にその綻びから逆算して『ソース』を解析し、『魔法』を使用出来る他人から同意を得て『カット』し、それを物質に『ペースト』する事で『魔法付与』という新たな概念を創出したんですよ？

しかしお前等は何故が長い間それを見過ごしていた訳ですし。

再三の我々『委因界』による再調査の提言すら無視し続けてまでね

……

まさか『魔法付与』なんて大した事無いモノとか思っていた訳じゃないでしょうね？」

「そ、それは……」

痛い所を突かれてたじろぐ巨大ネズミ（仮）。

そうなのだ。

彼等『抑止界』は最初は『魔法付与』など大した事が無いと思っていたのだ。

確かに最初は大した能力では無かったのだから……

数回使っただけで壊れてしまうし、その際には付与されていた魔法も元の所有者に戻ってしまうという欠陥技術。

だが、彼らが創り出した『魔法付与』という新しい概念……それが

生み出した影響が彼等が思っていたよりも大きかったただけなのだ。

それは『原種』の発生。そして、それから派生する様々な影響。

「よもや忘れたとは言いませんよね？」

お前等は確か当時こういつていたんですよ？

『魔法付与とは自然物が高密度の魔力に長期間晒されて出来るモノ』。

確かにその方法で『魔法付与』されたモノは出来ますが、それはほとんどが『原種』と呼ばれる超希少品しか無いのは周知の事実ですがね？

ちなみに『原種』にならなかったモノは『妖怪』『妖精』『精霊』のいずれかになる事ぐらいは流石にほんくらなお前等も当然知っていると思いますが……

つまり事実から言くと、『普通の魔法と同じ効果しか無い魔法付与物なんて存在しない』って事なんですよ。

理解しましたか？ それとも『化身神』として『世界』に具現化したせいで、使っていない脳が腐ってしまいましたか？

元『世界の守護者』さん？」

「……だが我々も問題の解決に努力はしたぞ？」

それを言った途端に再び美女（仮）の威圧感が増し……とうとうキレた。

「その努力の方向が全然違ったのをいい加減に認めろつてのダボが！

お前等『抑止界』の仕事は雑過ぎるんだよ！

お前等が事態に漸く気付いたのは、あの『世界』で『魔法付与』されたモノ『魔法付与物』が公然と流通し始めてからだろっが！

いくら高額で取引されるからと言っても、もはや世間の一般人にまでその存在が知られてしまつてはもはや隠蔽するのは無理……

慌てて最近になってから『修正パッチ』を施したようだが、今となつては最初から無駄な事だという事にすら気付かないとは……

既に『世界』に定着した概念を消し去るのは我々が『神々』だった時なら不可能では無かつたかも知れないが、『魔大戦』の影響で『化身神』と『変質』してしまった我々にかつての力を振るえる訳が無いだろうが！

それなら今後は『魔法付与物』を一切作らせない代わりに『魔法』を与える交渉をすればいいものを……

だがお前等は今度は我々に何も相談せずに秘密裏に『魔法監視機関』という秘密組織をあの『世界』に作つて、原因を作つた『彼等』を虐殺するという暴挙を平氣で行つたよな？

……一体どこのワンマン経営だつちゅーの！

そして何だ？ その際に再び大きなミス……『彼等』のうち一人を生き残らせてしまつてゐるし、もう呆れて何も言えないわ……

『やる・やらない』はそちらの勝手だが、きつちりやる事をやらなきゃ駄目だろうが！

虐殺するなら完全に殺し尽くせつて話！

その中途半端な行為の御蔭で『彼等』の一族が蓄積し続け、未だ『アーカイヴ』にすら存在しない様々な知識が全て今回の事件の当事者である『彼』に継承された事……

そして今回の件……『アーカイヴ』への『不正アクセス』は、どう見ても過去に『ソース』を漏らす原因となつた事件も関係がある可能性が高いし、そうなる最初からお前達の杜撰な改竄に非がある……つまりお前達のミスが今回の『不正アクセス』に繋がつてんなら、お前達にも非があるだろうが！

それを棚に上げて我々を一方的に攻撃するとは……いつから『抑止界』はボケ老人の集まりになつたんだ？ あ？」

一気に突かれたくない部分ばかり突かれまくった巨大ネズミ（仮）は最早、ぐうの音も出なかった。

てゆうか……『冠無官無』にいる『化身神』のほとんどが、美女（仮）のあまりの二重人格ぶりに引いていた。

「ほら何か反論してみろよ？ こっちはお前等の尻拭いばかりしていて気が立ってるんだ。

幾らでも受けて立つぞ？」

「……いや、ありません……スミマセンでした……」

何だか巨大なネズミはいつもより小さく見えた。

「じゃあ『彼』には不干涉って事でOK？

文句があるならまた相手になりますよ？」

美女（仮）はにっこり笑った。

とても魅力的な笑顔だった……その本性を知ってしまった後では逆効果であったが。

「あんな感じで論破しましたが、良かったですかね『マスター』？」

ここは美女（仮）の私室。

そこで美女（仮）は目の前にある異様な存在感を放つ『ナニカ』に話しかけていた。

『抑止界』の……にはいい薬にな……だろ
うよ《

途切れ途切れな『マスター』の音声のみが、『ナニカ』から伝わってくる。

ただ、とても楽しそうな様子は伝わってくる。

「しかし、別にたかが『ARE』や『ARMS』程度の所有者なら、別に処理しても問題無いのでは？」

確かに珍しい能力ですが、かなり制約があるようですし……」

《……あれはそ……モノじゃないよ……あれは……知……に至る……力だよ》

「すみません……よく聞こえなかったんですが、何の能力なのですか？」

《……？……ここに誰……》

「『マスター』？　どうかしましたか『マスター』！」

《……ではまた……》

プツッ、と一方的に通信が切れた。

「『マスタアアアアアアアアアアアアア』……！！！！！」

さっきの続きが超気になるんですけど！ 殺生ですよ！」

後には絶叫する美女（仮）と、存在感を失った『ナニカ』だけが残

された。

鑑定士の能力拡張

「坊やは私のモノだ！

まさか一目惚れなんてお伽話や都市伝説の類だと思っていたんだが、まさか本当にあるとはね……

やっぱり女つてのは強い男つてのに惹かれるんだね。

まあそんな訳でこの子は私のモノだから、お嬢ちゃんは今早くお家に帰ってお母さんのおっぱいでも吸ってな！」

「え？ 何言ってるか意味不明なんだけど？

そもそも私をここまで誘拐したのはアンタ達でしょうが！ なのに何なのその言い草は？

まあサダが助けてくれたからいいんだけど……

あ！ あとサダはモノじゃ無いんだからね！

それにサダとの付き合いはボクの方がず~~~~~~~~と長いんだよ？

ポツと出のオバさんは引っ込んでなよ！」

「な……何だとこの糞餓鬼！」

「何よ！ 本当の事じゃない！」

俺の目の前では少年を廻る修羅場が展開されていた。

あれ？ 犯人達を確保したり一番活躍したのは確か俺だよな？

何だか彼女達の中ではその事実が改竄されているようだ。

恐るべし『NADEPO』……

「……ンさん！……て！」

あ。そういや『アイツ』こと『あいつわかまつ相対和歌祭』は、確か親父さんが男の子が欲しくて女の子の名前を全く考えてなかったために、お母さんが音だけ一緒の『和歌祭』わかまつに変えたって話だったっけ……

「アランさん！ 助けて下さい！」

……さつきから少年が『アランさんアランさん』って煩いな！
大体ここに俺の師匠の名前と同じ名前の人間なんて居たか？

……
……

……あ、俺の偽名だったわ（笑）
やれやれ……少年の助けを求める声のせいで、折角の現実逃避が無駄になってしまったよ。

「どうした少年？」

「だから助けて下さい！」

「……何を言っているのか理解出来ないな。
素敵なレディの二人にモテているのを、わざわざ俺に自慢したいのか？

……何だか具体的に言葉で表現したら、だんだんムカついてきたわ
……！」

「違います！ このままだと僕の腕が千切れそうなんです！」

お願いだから助けて下さい！」

「……一つ助言をしようか？ 『他人の不幸は蜜の味』という格言があつてだな……」

「いいから助ける！」

少年はついにキレました。

でも半泣きしながら切れるなんてお前は厨二キャラか！

まあそろそろ助けてやるか。

「そこのお嬢さん達？ そんなに引つ張ると、少年の腕が壊れるよ？ 俺的には構わないんだが、後々恨まれるのは君達なんだからいい加減にしたらどうか？」

「オッサンは引つ込んで！」

「ブサイクが私に声をかけんじやないわよ！」

プツンッ！（私、堪忍袋の緒が切れました！ CV：水樹奈々）

「ああ……声をかけて済まなかったね……じゃあいい加減煩いから黙れこのゴミ屑共！」

そう言いながら魔法付与『空間操作』で彼女達の額付近の空間を思いつき引つ張って、それを一気に戻す。

所謂ひとつの『空間デコピン』である。

その威力はガチガチに魔法や魔法付与で防御していようが絶対に防げない。

「ギャツ!!!!!!!!」

案の定、双方共にまるでオッサンが上げるような悲鳴を上げながら後ろに吹っ飛んでいった。

やばい。少年も巻き込んでしまった。(棒読み)

……しかし、この程度でキレルなんて、何だか俺の方こそ厨二キアラ全開じゃねえかよ……
まあいいけどさ。

さて、何故こんな事態になってしまったのだろうか？
そのためには少し時間を遡らねばならない。

さてそろそろ本気になって『鑑定』を頑張るか！
『アイツ』を誘拐犯から無事に助けなきゃならないし。

……叩いても起きないままの少年はもう放置しておく。正直居ても足手纏いだしな。

(では……『鑑定』開始！ 鑑定対象は、ここから見える範囲にある全ての足跡！)

まず俺は周りにあるであろう足跡を『鑑定』する。
すると地面に無数の足跡がうつすらと光って見えた。

俺は驚愕した。

別に足跡が光って見えた事に対してでは無い。

今まで『鑑定』の際に必ずと言ってもいい程に感じていた激しい頭痛等の違和感が全く無かったからだ。

そう言えばさつき少年の能力を『鑑定』した時その事に気付いてはいたのだが、鑑定結果の方が滅茶苦茶驚いたから今の今まで頭からすっかり抜けていたようだ。

だが『鑑定』の変った点はそれだけでは無かった。

それぞれの足跡の人物データが俺の中に流れ込んで来る。

対象が意外と多かったので、ここ数時間の間についた新しい足跡に対象を絞ってみる。

ちなみに足跡がついた時間が新しい方がより明るくなっており、古いモノは新しいモノに比べて徐々に光が暗く見える。

実際これは便利である。

時間指定検索機能も搭載しており、心の中で（今日ついた足跡）と思いつかべるだけでその足跡だけが光るようになるのだ。

そしてこの機能の御蔭で、俺と少年と『アイツ』以外の足跡が三つもあるのが解った。

『アイツ』の足跡よりも若干だが彼等の足跡の方が新しい事から導き出される答えは、どうやら彼等は『アイツ』の跡を付けていたようだ。

だがここで問題が発生した。
何故ならこの足跡は俺が倒した例の魔法監視機関の三人の足跡なのである。

何故解ったのかと言うと、『鑑定』のステータス画面にそう出ているのだから仕方が無い。

どうやら俺が前に作り出した索敵システムとまだリンクしているよ
うなのだ。

ただそれらの魔法付与物自体は幼女に預けてここには無いはずなの
だが……

でもやはり変だ。

何故か前に俺が『鑑定』出来なかったはずの彼等の名前まで解るか
らだ。

……『鑑定』の能力がパワーアップでもしたのだろうか？

ちなみに三人の名前は

ドロン＝ジョーカー

トンス＝ラージ

ボー＝ヤッキー

という、どっかで聞いたような名前だった。

……色々考えるのは後にして、とりあえず『アイツ』の追跡を開
始し……「ぼ……僕も連れて行って下さい！」……ようとしたら微
妙なタイミングで少年が目覚めたようだ。

正直連れて行くのは面倒だな。足手纏いにしかないだろうし。

「面倒k「お願いします！」……ほっ」

少年は『DOGEZA』をしていた。それは美しい『DOGEZA』
だった。

……こんなモノを見せられちゃ連れて行くしか無いか。

「……四十秒で支度しな！」

「！はい！」

後は簡単だった。

『空間操作』で位相をずらしながら『鑑定』結果に従って『アイツ』と犯人達に追い付き、不意撃ちチックに犯人達の頭上の空間を歪ませて一気に元に戻した反動で衝撃を与えて気絶させて終了した。

ちなみにこれには『空間拳骨』という技をつけてみた。

……ダサイな。

でもこの直後に色々予想外の事態が発生した。

何と『四次元袋』に入れていた捕縛縄で少年に誘拐犯達を縛らせただけなのに、何故か『NADEPO』が発動してしまったのだ。

もしかして少しでも触れただけでもアウトなのか？

『NADEPO』エ……凄すぎる効果だぜ……

それも犯人達の中の女だけじゃなくて男達にも発動したから……いきなり復活して少年に向かって行ったから、過去の自分が襲われるという気持ち悪い光景を見たくないので再び同じ方法で気絶させた。

今度はかなり強めにやったから多分大丈夫だろう。

……首が変な方向に折れ曲がっているように見えるのは、光の屈折に違いない。

地面が何だか赤く見えるのは、夕日が赤い理屈と同じだと思う。

または赤方偏移の一種に違いない！

でも女には手を出すのをすっかり忘れていたために、それを止めようとした『アイツ』と巻き込まれた少年が偶然触れてしまい……後は察してくれ。

そんな訳でさっきの流れになるのだが……面倒だからこいつ等全員埋めておくか？

もしかしたら故意にパラドックスを作り出す過程で目標が達成出来るかも知れないしな」

「途中から声に出てるから！ それもかなり人間として最悪だぞ！」

こいつはうつかりだ！

俺は声のした方に振り向くと、そこには俺の予想通り……少年が頭を押さえながら座り込んでいた。

鑑定士の懸念

俺は少年と『アイツ』に連れられて、俺の故郷でもある村に向かっている。

まあ『アイツ』は歩けるはずなのに少年におんぶされている状態だが。

あれ絶対わざとだろ……

まあ村の座標も過去において既に『鑑定』済みだから、魔法付与『空間操作』で一気に跳ぶのも可能なのだが、隠れ里みたいな村を突然現れた俺が知っているのは第三者から見たら非常に怪しいので、仕方無く彼等の後を目隠しをした状態で余った捕縛縄で誘導して貰いながらゆっくり着いて歩いている。

何故そんな面倒な手段を取っているかと言うと、例の魔法監視機関の三人に対する処罰は『ここ』では異邦人に過ぎない俺が勝手に行う事は許されないからだ。

そうなると少なくとも『アイツ』の身内、さらには村長や長老達の意見も聞かなくてはならないだろう。

そんな訳でこうやって目隠しをしているのは、少年からの『村の場所を知らないようにしたい』という要求を飲んだからだ。

まああそこは余所者には厳しいからな。

ちなみに気絶したままの例の三人は『四次元袋』に放り込んでいる。もちろん彼等が持っていた魔法付与物を全て取り上げて、持ってい

た捕縛縄に『裏鑑定』で魔法付与を移した上で念入りに縛り上げた。

その際に何故か少年が異常に興奮しつつ魔法付与『四次元袋』についてウザい程に質問してきたが、うっかり少年に触られて『NAD EPO』されてしまうのは遠慮したいと言っよりも『絶対にNO!』って感じなので、少年には後日ちゃんと話す事で勘弁して貰った。

……もし俺が『NAD EPO』されて少年“過去の自分と”『ベークンレタス』してしまうのは絶対に嫌だからな。

いや……少年の精神状態はまともなまだから、むしろ迫る俺よりも、拒否しても一方的に迫られるであろう少年の方が精神的ダメージは遥かに大きいだろう。

まあ万が一俺の『NAD EPO』が解けた時は、俺の精神が崩壊するレベルのカウンターダメージを受けるのは確定だがな。

あと多分証拠隠滅するために少年を物理的に全力で消し去ると思う。当然だが事情を知る者も同様だ。

巻き込まれた者は運が悪かったと諦めて貰うしか無いだろう。

余談だが、捕縛縄に付与した効果は『強制拘束』『反応下降』『魔力封印』にしておいた。

やってから気付いたのだが……最初に捕縛縄に施されていた魔法付与と全く同じだな。

もしかしてあの馬鹿が俺に使った捕縛縄にかかっていた魔法付与は俺が今こうやった結果存在したのかも？

……あまり深く考えるとタイムパラドックスが起きそうだから……俺は考えるのを止めた。

それよりも、優先すべき問題はこっちかも知れない。

俺の前では『アイツ』……もう色々と面倒だから少女と呼ぶか……が少年におんぶされながらイチヤイチヤしてやがるのだ！

俺の『はちゅこい』が……！

いや今はそれは横に置いて……

今の状態の少女を村に連れて帰ったら色々とヤバイ感じがするのだ。

現状を簡単に説明すると……それまで村八分状態のまま放置されていた少年が、ある日突然『神々』が忌避する能力『NADEPO』に目覚めてしまい、それを村で一番人気の少女に何も知らなかったとは言え『NADEPO』してしまったのだ。

……俺の能力が戻ってきたのに浮かれポンチになって、決して伝えるのを忘れていたからじゃ無いんだからなか、勘違いするなよ！

だがあの『村』に住む者達は、基本的に自分達に『魔法』を与えてくれなかった『神々』が嫌いなので、少年はこれで『村』に住む者達から受け入れられるはずだ。

……少女が好きだった者達以外には。

問題はここからだ。

今まで少年は殆どの人間から無視されていたはず……それが急に周りからちやほやされ出したら、少年の心は一体どうなるだろうか？

今まで溜めに溜めた鬱憤が一気に噴き出して爆発するかも知れないし、前世でよく読んだ『オリ主ハーレム』みたいに色々な女性に手を出しまくるかも知れない。

……オラちよつとわくわくしてきたぞ！

まさかリアルで『SHURABA』を拝めるとは……ありがたやありがたや……

ちなみに現状では『NADEPO』を完全に解くのは難しい。

俺も知識でしか知らないのだが、原種『聖石負療』^{せいせきふりょう}という魔法付与物があれば、全ての負ステータスを癒す事が出来るのだが……残念ながら過去に鑑定した事が無いので持つていないのだ。
もちろんそれで解除出来ない可能性も高いがな。

その魔法付与物の欠片でもあれば、それを『ARE』でブーストした『鑑定』を経て『裏鑑定』をすれば魔法付与物を再構成するのは可能だが、流石に聞いたり見たりしただけの知識のみで魔法付与物は創り出せない。
流石に無い物は創れないしな。

だが……もしかしたら『似たようなモノ』は創れるかも知れない。

その根拠は実際俺は既に今までに無い『魔法付与』を幾つか創り出しているからだ。

『加速装置』『確率操作』『空間操作』『機人原則』『四次元袋』など、今までに無い概念を組み込んだ事で従来の魔法付与を遥かに超えた数々の『俺オリジナル』。

それらはこの世界には未だに存在しない『新しい概念』を魔法付与にしたモノである。

つまり何を言いたいかと言うと……多分だが俺の知識にある能力と
か秘密道具なら何でも創れる可能性が高いのである。

もちろん制約はある。

『新しい概念』を魔法付与にした『俺オリジナル』を創るためには
『ARE』を使わねばならないのだが、一日三回という回数制限の
為にそうそう創れないし、そもそも一回の『ARE』で一個の『俺
オリジナル』が創れるとは限らないのだ。

『機人原則』みたいに簡単な条件付けシステムなら一回の『ARE』
で何とかなるが、『四次元袋』みたいな未来の超科学を再現するに
は実際創るのに五年以上掛かったからな。
まあずつとそればかりやっていればもつと早く終わったが。

具体的には今の『四次元袋』に辿り着くまでに既存の魔法付与が百
以上、『俺オリジナル』の千近くが下敷きに使われているしな。

「アランさん、もう目隠しを外してもいいですよ」

そんな事を考えているうちにどうやら村に着いたらしい。

そして俺が目隠しを外そうとした瞬間 轟音と同時に俺の腹に
刺すような熱さを感じた。

「え？」

少年の間抜けな声が聞こえた……いや、間抜けなのは俺が。
解っていたはずなのに、こうなる可能性を考慮していなかった俺の
ミスだ。

さっき俺はこう考えていたじゃないか。

『まあそこは余所者には厳しいからな。』

俺は徐々に失われつつある力を振り絞り、何とか目隠しを外した。
そこには 俺に対して『銃』を構えた村人が十数人並んでいた。

（糞が……）

俺は村人達を睨みながらも徐々に意識が薄れていくのを感じていた。

断章 鑑定士と『王子様』

「…………どこだここは？」

ふと気付いた時、俺は奇妙な場所に一人きりで仰向けで寝転がっていた。

最初は夜だと思った。しかし徐々に意識が覚醒してくるとそれは間違いだと気付いた。

そう……そこは『図書館』の中だった。

どうやら俺はその図書館の中にあるふかふかソファの上で横になっていたらしい。

真っ暗な空だと思っていたのは単に高すぎて天井が見えないだけのようだ。

そして俺の周りは巨大な本棚に四方を囲まれていた。

天井を見ると解るようにこの図書館には照明器具など見当たらないのだが、何故だか解らないのだが自分の周りだけはハッキリと見える。

しかしそれ以外は闇の中でよく見えない。

一体どれだけ巨大な図書館なのだろう？

しかし周りには人の気配が全く感じられない。

まるで俺は夜の図書館内に放置されてしまったようだった。

だが俺がこんな寂しい場所に放置されている理由が全く解らない。

確か俺は村人に『銃』で撃たれたはず……なのに何故こんな場所に居るのだろうか？

一瞬、撃たれた事自体が夢かと思ったのだが、傷痕こそ無いものの腹部には妙な違和感がある。

もしかしたら村人の誰かが回復系魔法付与物で治療してくれたのかも知れない。

だが疑問も残ったままだ。

治療した上でわざわざこんな場所まで運んでくる意図がよく解らない。

治療が施してあるのは、恩人である俺を誤解か何かのミスで攻撃してしまったのが解ったからだと思う。

そうでなければ治療する事自体がおかしいからだ。

だが、恩人だと解っているのにこんな寂しい場所に放置する人間がいるだろうか？

普通は居ないだろう。だから変なのだ。

第一俺は村の傍にこんな巨大図書館があつたなんて聞いた事すら無いのだ。

夢かと思っても仕方無いだろう。

ほつぺたを抓っても痛いだけだったから夢じゃないとは思うが……

そもそも何故俺が撃たれなきゃならなかったのか意味不明過ぎる。

村の場所を余所者に知られたから撃つたという線も少し弱い。
ちゃんと目隠しもしていたしな。

もし知られたとしても、村にある原種『想起退拭そっきたいしよく』で今後一切あの村に関する事を想起出来ないようにする事とかが可能であるからだ。

それに……村には多分俺の知らない魔法付与物が存在したはずだ。

仮に何らかの魔法付与物で俺の心を読んだとしたら、こんな場所に放置はしないだろう。

『未来を知っている』との言う事はある意味チートだからだ。それなのに放置か……一体何が起こったんだろうか？

(……考えても無駄か……)

今回はあまりに情報が少なすぎる。

だから情報を得るために現在位置を『鑑定』をしようと思ったのだが……何故かうまく出来なかった。

『鑑定』した結果、ここは村の座標とほぼ同じなのだ。

俺の記憶に無い図書館でも最近出来たのだろうか？

不思議がりながらも『鑑定』を終了し、俺はとりあえず暗闇でも見えるように魔法付与『空間操作』を『裏鑑定』で『暗視装置』に書き換えて発動させようとした……のだが、こちらも何故か上手く発動しないのだ。

いや……違う。魔力はちゃんと消費されている。

つまり発動自体はしているのだが、何らかの力で無理矢理抑えつけられているようなのだ。

何度か試したのだが魔力を無駄に消費しただけに終わってしまったので、魔力付与物の使用は控える事にした。

念のために魔法付与『暗視装置』は『空間操作』に戻しておく。

そんな訳で俺は数メートル先しか見えない図書館内を恐々歩いている。

するとちよつと向こうに少しだけ明るい空間が見えてきた。

そこは大きく開けた空間だった。

少し薄暗いせいか、向こう側や左右の壁が全く見えないほど大きかった。

ちなみに後方の壁には、ずっと上の方まで本棚が続いている。

やはり天井は見えないが。

だが、その空間で一番インパクトがあるモノは別のモノだった。その空間の床には巨大な『穴』が開いているのだ。

やはりどのくらいの大きさなのか解らない。

何でこんな建物の中にこんな大きな穴が存在するのだろうか？

ちゃんと背丈ほどもある柵に囲まれているのだが、危ないには変わらないだろう。

チビッコとかが興味本位で乗り越えて落ちちゃったら一体どう責任を取るつもりだろうか？

まあ柵にはこんな警告文もあるから大丈夫だとは思うが。

【警告】

お子様は絶対に覗いてはいけません！ まだ早い！

大人の方は自己責任でお願いします。

深淵アビスを覗く時、深淵アビスもまたこちらを覗いているので心してください！

何とも心惹かれる警告文だった。

（……俺はもう大人だから自重すれば大丈夫だよな？
もしかしたら何か現状を打破するための何かが見えるかも知れない
しな）

そう言い訳しながら俺は穴の底を見ようと柵から乗り出そうとした時、不意に後ろから声がかけられた。

「止めておいた方がいい。君にはまだ早い……」まだ」ね」

ビクッとなりながらも何とか俺は悲鳴を上げずに済んだ俺は慌てて振り返る。

そこにはつい先程まで何も無かったのに、今は白くて大きな丸型のテーブルと椅子が幾つかが突如としてあった。

そして……そのうちのひとつに腰掛け、メイドらしき美しい女性に傳かれながら優雅に紅茶らしきモノを飲む『王子様』としか表現出来ない容貌の少年が居た。

そしてそれを飲み終わった『王子様』は笑顔で俺にこう言った。

「ようこそ。『世界図書館』へ」

鑑定士の反撃準備

「……ん？ あれ？ え？ ええッ？」

全然意味が解らず俺は頭が混乱していた。

つい奇声を上げてしまったのだが、これはちょっと仕方無いだろう。何故ならさっきまで『世界図書館』に居たはずが、ほんの一瞬で目の前の光景がガラリと変化したからだ。

そう。俺はいつの間にかベッドの上で横になっていたのだ。

視界には知らない天井が映っている。

つい一瞬前まで『王子様』と会話していたのに一体何が起きたのだろう？

当然だがここは『街』にあったかつての自分の部屋では無い。

だがこの部屋には何の見覚えも無いし意味不明だ。

まさか今までの事が全て夢オチであったのだろうか？

（いや……それは無いな）

何故断言出来るかと言うと、アレが夢では無かった証拠がちゃんとここにあるからだ。

俺の右手には『王子様』から貰った一枚の金属製のカードが握りしめられている。

それは前世でよくあった類の、普通に世間にありふれたカードの一枚によく似ていた。

だが、これは そんなモノではアリエナイ。
俺は『あの場所』で何回も試みた『鑑定』を再び開始する。

……

鑑定結果：『アクセス・キー』

……

やはり何度試しても『鑑定』結果は同じだった……
これはハッキリ言うところ異常事態である。
そう。このカードからはたったこれだけの情報しか読み取れないのだ。

確かに今までに俺にも『鑑定』し切れないモノは数多く存在した。
例えば『馬鹿の片割れ』に『魔法監視機関の奴等』……そして『G』。

だがそれはあくまでも不完全にしか『鑑定』出来なかっただけだ。
そして今の俺は多分過去最高の『鑑定』能力を所持している。
それは『魔法監視機関の奴等』の名前を鑑定できた事で既に明らかだ。

そんな俺がたかだか金属板すら読み取れないなんてアリエナイ。
つまりコレは今まで鑑定した中でもかなりのキワモノだと言う事になる。

…… ちなみに『孤児院長』は別格だ。
彼女に関しては『読めるけど、俺の理解を超える存在のために読め

ない』のだ。

そのために全ての情報^{ソース}が『Unknown』になっているのだろう。

そう……彼女にはまるで『魔属』に似た何かを感じる。

だが彼女は『魔属』では無いはずだ……なら彼女は一体……？

だが俺としては積極的に彼女の秘密を暴くつもりは無い。

藪を突いて蛇が出てきたら大変だからだ。

それもある意味『魔属』よりも厄介な気がする……俺の本能が警告するのだ

まあ彼女が何者であろうが、俺の恩人には変わらないのは厳然たる事実。

ゆえに放置だ。決して俺がヘタレでは無い。断じて否ッ！

さてそろそろ現状に目を向けてみよう。

あ………ありのまま 今起こった事を話すぜ！

『気付いたらベッドの中だった……（ry』テンプレ乙。

………しかしどうしてこんな場所で俺は寝ていたんだろうか？

何かあったような気がするのだが、『世界図書館』での滞在時間が滅茶苦茶長過ぎたのでよく思い出せない。

それに唯一装備していた魔法付与『空間操作』も無くなっているし。

もしかしてこっちが夢なのだろうか？

真偽を確かめるために俺は頬つぺたを抓ってみたのだが……

「……………痛過ぎだろコレ……………」

凄く痛かった。どうやらコッチが『現実』のようだ。

だがそうなると『世界図書館』に居た方が夢だったという事になつてしまう。

しかし俺の手には『アクセス・キー』がある時点で夢では無かつたはず。

一体何が起きているんだろうか？

しかし現状では判断がつかないので、答えを出すのは保留にする。

（でもあの『王子様』が言っていた事も真実だとは到底信じられないんだがな……………

まさか俺が転生かつ能力を手に入れた切っ掛けがあんな……………

……………やめよう、思い出すだけで悲しくなるからな）

俺はある意味奇妙奇天烈でショッキングな内容の話を『王子様』から聞かされたせいで、コッチでは酷くうなされていたようだ。

全身にグツシヨリと大汗をかいており、もはや下着では吸収出来ない位の量の汗をかいているので、何だか下着が身体にくっついたままベトベトしていてかなり気持ち悪い。

（うわ~~~~マジで風呂入りたいわ……………

風呂はいいね……………風呂は心を潤してくれる……………リリンの生み出した文化の極みだよ）

俺はどこかの銀髪さんが言ったような内容と似た言葉を心の中で呟きながら風呂に想いを馳せた。

とりあえず部屋を出て風呂の場所を調べようと思いつきながら起き上がろうとしたのだが、急に腹と背中中に激痛が走った。

思わず涙目になりながらも何とか情けない悲鳴を上げずに済んだ。腹を見てみるとデカイ絆創膏が貼ってある。多分背中にも同じモノが貼ってあると思う。

それを見て俺はようやく思い出した。

（ああ……村の手前で狙撃されたんだっけ……忘れてたわ）

現在俺は全く見覚えの無いベッドの上に居る。

つまりこれは誰かが俺をここに寝せてくれたのだろう。

だが確か村の近くには他の集落は無かったはず。

つまり十中八九ここは俺の故郷である村の中だろうと思われる。

さて俺がここに居る理由だが幾つかだが挙げられる。

それは『銃』で撃たれた腹がある程度だが治療してある事からも伺える。

ただし最低限の治療しか施されていない事から、まだ俺に対して何かあるようだ。

だが中途半端過ぎる。

こんな状態で放置するのはハッキリ言って悪手だ。

たとえ魔法付与物を奪ったとはいえ、最低でも誰かに俺を監視させておくべきだった。

だが彼等はそれを怠った。ならコッチも手加減は要らないようだ。

魔法付与物は取り上げられているが、今の俺ならゼロから『原種』レベルまで作成できる。

それどころか『世界図書館』からの知識によって身体の部位ごとに魔法付与すら可能だ。

とりあえず俺は自分の身体中に魔法付与を施しておく。

そんな風に準備をしていると、俺の耳に何か微かな音が聞こえた。さて……誰が俺の相手になるのかな？

鑑定士と師匠

「ん？ 目が覚めたか？」

部屋のドアを開けて入ってきて話し掛けてきた初老の男を見て、俺は心臓が止まるかと思うほどに驚いた。

何故ならその男は……かつて俺のミスが原因で結果的に死なせてしまった『師匠』だったからだ。

（な……何でここに『師匠』が居るんだよ？

確かにこの時期の『師匠』はこの東大陸に居ただけだよ……）

まあその御蔭で俺は『師匠』と巡り逢えたのだが。

……唯一生き残った俺が腹をすかせた結果『師匠』に襲い掛かって返り討ちに遭うとは……

その実力を知らないとはいえ俺も馬鹿だったと思う。

そうそう。実は俺の住んでいた村は『街』と同じく東大陸にあったのだ！

だが村は世間一般的に『秘境』と言われるような場所に位置しており、さらに様々な魔法付与物の効果で外界から隠蔽されていた。

そのために貴重な魔法付与物を手に入れたい者が噂を聞いて近くまで来る事はあっても、ほとんどの者は全くの無駄な努力に終わった。

仮に幾つかの偶然によって村に辿り着けたとしても、警備役の村人達によって捕縛されるのがオチである。

それもある程度の金品（武器や食料を除く）を巻き上げられた拳句、
原種『想起退拭』^{そつきたいしよく}によってシツカリと記憶操作されてから放り出さ
れてしまうのだから、余程の奇跡が起きなければ再び村を訪れる可
能性はほぼ無いだろう。

無事に人里まで戻れたかすら怪しいが。

だからこそおかしいのだ。

何故俺が村人達にいきなり『銃』で撃たれなくてはならなかったの
か理解できない。

確か異邦人に対していきなり攻撃する事は知る限り無かったはず。

……もしかしたら現在進行形で何か他の問題が起きているのかも知
れない。

『師匠』がここに居るのかはもつと謎だが。

だが『師匠』は一緒に居た時もたまにフラツと出ていつて何日も戻
らず、戻ってきたと思ったら珍しい薬草や綺麗な石とかを持って帰
ってきたりするような風来坊だったのだ。

たまたま村に訪れて、どうにかして村に滞在していた可能性も否定
出来ない。

（確か『師匠』は秘境とか遺跡とか魔法付与物が好きだったから
な……同じジジイ同士の誼で村長や長老とかと話が合ったのかも知
れん……）

そう。当時の俺は頭から木から落ちて生死の狭間を彷徨っていたか
ら、当時村人以外の誰かが来ていたかなんて全く知らない。

そしてもしかしたら俺が知らないだけで過去に何度も来ていた可能
性すらある。

そんな事を黙って考える俺に対し『師匠』は何か勘違いをしたのか、何かを氣遣うような声を掛けてきた。

「大丈夫か？ まだ辛いならまた後にするが……」

「あ、はい。大丈夫です」

俺はギクシャクしながらも何とか返事を返した。

『師匠』はその間ずっと俺の目を見つめていたのだが、いきなり予想外の質問をしてきた。

「じゃあいきなりだが聞いていいか？

どうしてお前さんはあんな寂しい場所でケガをして倒れていたんだ？」

「？ は？」

「……もしかして覚えていないのか？ お前さんは海岸に倒れていたんだよ」

（海岸？

俺が撃たれたのは森の中のはずだぞ？

そのまま放置されていたのなら兎も角、わざわざ危険を冒して海岸まで運んだのか？

一体何のために？ 全然解らん……）

俺の頭の中はさらにゴチャゴチャになってしまった。その様子を見た『師匠』は優しく声を掛けてきた。

「どうやら記憶が混乱しているようだ……

まあいい。今日はゆっくり休め。俺はちょっと出掛けてくるから留守番を頼む。

あ、便所はその扉を出て左だからな。

もし腹が減ったらその机の上にあるモノを適当に食べてくれ。

ただし……家からは一步も出るなよ？」

そう言つて『師匠』は俺がお礼を言う前にさっさと部屋から出て行つてしまつた。

暫く呆然とするが、時間が経つと共に妙な違和感に気付いた。

（ここは一体どこだ？　これほど魔力が満ちている空間なんてそうそう無いぞ？

まるで何かの結界の中に居るような……でも『魔法探知』にも特に引つ掛からないし、そもそも凄く自然な感じ……何だか不思議だな）

俺はすぐさま『鑑定』を開始する。

鑑定対象はもちろんこの時空間そのものにだ。

……

鑑定結果

時間軸：人紀1049年9月25日（炎日）

空間軸：X：119284　Y：296041　Z：66829

状態：空間魔力飽和状態

……

鑑定結果は想定外だつた。

『事実は小説よりも奇なり』とよく言われるが、どうやらそれを地で行く超展開が俺の預かり知らない所で起きたようだ。

（ここは……俺が元々居た時間軸から更に十年以上も昔だ……と？）

もしこれが俺を騙そうとした企画であつたらどんなによかつたか……正直誰かに『実は全部僕達が仕掛けた冗談だつたんだよ』と言つて欲しかった。

しかし残念ながら俺の『鑑定』結果自体は嘘をつかない。

それが嘘になる場合は大元の『アカシツクレコード』が何者かに改竄されていた場合だ。

ただし仮に改竄されていた場合でも、歴史の大きな流れ自体までは改竄出来ない。

変えられるのは本当に少しだけなのだ。

前世の歴史に例えて具体的に言うと、俺が過去に飛んで『本能寺の変』を止めようとしても、既に『アカシツクレコード』に死亡を記載されている信長を助けるのは不可能という事だ。

信長個人を助ける事は可能だが。

ただその場合は彼に与えられた『分類表』を『名も無き一兵卒』『歴史の変革には一切関われない』という条件に書き換えなければならない。

その場合……もはや彼は皆知る信長ですら無い男になってしまう。

まあ多分本人も絶対に了承しないだろうが。

自分の行ってきた手柄が全て自分ではない第三者のものになつてしまふなんて、彼にとって死ぬ事よりも嫌な事であらうから。

さらに……彼を助けたとしても戦死した人間の数そのものも変えら

れない。

つまり信長の死を受けなければならない新たな『生贄』を用意しなければならぬのだ。

その『生贄』が信長の居たポジションを塗りつぶしてしまうために、彼が後世で信長にとって代わってしまう訳だが……

まあ話は逸れたが、ここは過去の世界と考えて間違いは無いだろう。ああ認めよう。今はさっきまで居た世界よりもさらに過去の世界だと。

（そう言えば確かによく見ると何だか『師匠』が若かった……か？あれ？ 俺の記憶の中にある昔の姿形とあまり変わっていないような……？）

だがそれよりも今は気になる点が一つあるので検証は後回しにする。その気になる点とは 今俺が居るこの空間軸がある位置が凄くおかしいのだ。

この空間軸が含まれる大陸は確か……それに『空間魔力飽和状態』って……

ヤバイ……非常にヤバイよココ……

「ココってあの『魔大陸』じゃねーか！」

思わず叫んでしまった俺は悪くないから謝らない。

でも何で俺はこんな超危険な場所に居るのだろうか？

【おい、今何て言った？】

急にすぐそばで声がしたために俺は固まってしまった。その声は『師匠』の声だったからだ。

（な……なんだ？ 『気配察知』によれば確かに『師匠』は離れた場所を移動中だぞ？

それに前以て『スロット』に入れてある『魔法探知』にも引つ掛からないから魔法付与物でも無いし……）

それなのに『師匠』はまるで俺の声を聞いていたかのように……
ちよつとまって？

『聞いていたかのように』……まさか！

俺は視界に入るモノ全てを『鑑定』した。

【聞いているはずだ！　おい！　何でここが『魔大陸』と知っ
てい
るんだ！】

『師匠』が再び話し掛けてきたが無視する。そして……とうとう俺は見つけてしまった。

『盗聴器』と『スピーカー』を。

（クソッ！ マジで油断していたわ）

『師匠』ならこの程度の発掘品なら修復するのも朝飯前だもんな……
 ってやバイ！ 『師匠』が物凄いスピードで戻ってきてやがる！

色々「OHANASHI」されるのも嫌だし、早く逃げなくちゃ！）

鑑定士の前世

俺は窓から逃げようとしたのだが、どうやっても窓を開ける事が出来ない。

椅子を投げて割ろうとしたが、窓ガラスに弾かれてしまった。

魔法付与物なら『魔法解除』で何とかなるのだが、『魔法察知』に反応が無いのでどうやら力技では無理くさい。

それでも『鑑定』して窓が開かない理由を調べるか、最悪『裏鑑定』で何とかしようと思ったのだが、それと同時に俺は窓の外に何かの気配を感じた。

『師匠』では無い。

まだ離れた地点にいるからだ。

……『気配察知』によると『師匠』は現在複数の何かを相手に戦っていて、ここに来るまでには時間がかかるようだ。
だがその邪魔をしている気配は徐々に減っている。逃げるなら今しか無い。

（この隙に玄関から ！）

だが俺はそこで窓の外にいるモノを見てしまった。

サイズ自体はかなり小さいが、それは前世で見た事がある姿をしたモノだった。

その名は『SPPO^{スプー}』。

正式名称は『Shadow Phantasm Of Outs

ider」

興奮先生曰く、『外部の影の幻』

実は前世の俺の直接の死因でもある。

前世で俺が死ぬ数年前、俺はある物理学教授の助手として『実験』に参加していた。

それは『我々の宇宙の外に観察者は存在するのか?』というコンセプトを基に、古今東西のありとあらゆる知識（オカルトも含めて）を集結させたトンデモ実験であった。

俺も内心『コレはねーわ』と思いつつも、報酬の高さに釣られて積極的に手伝いをしていた。

『実験』は俺の予想通り失敗の連続だった。

そして月日は流れ……あと一週間で『実験』が打ち切りというところまで比較的平穏な日々が流れた。

……今思えばあの時点で欲をかかずに逃げ出しておけば良かったのだ。

まさかあと一週間で『実験』がある意味成功するとは思わなかったのだから今更だが。

その日……『画伯』と呼ばれた現代の女性召喚士が一人で召喚実験中に、偶然『SPOO』を召喚してしまったのだ。

それは『この世にあらざる存在』であり、実験は半ば成功したが……『画伯』がその存在を確定した瞬間、彼女は狂ってしまったのだ。

多分彼女の脳が恐怖による過負荷に耐え切れなかったのだらう。

そして存在を確定された『SPOO^{スライ}』は何故か暴走し、当然すぐ傍にいた俺達は巻き込まれて全員死亡。ついでに俺達が居た研究所『NHK（脳内変換研究所の略語）』は日本の関東地方ごと完全に消滅した。……それどころか世界各地で『SPOO^{スライ}』は暴れまくり、各国の軍隊も集結するもあっさり全滅し、危うく世界滅亡の一手手前まで陥ったそうだ。

その緊急事態を受けて多重世界を管理する『天界』はついに『SPOO^{スライ}』を討伐するために特殊部隊を派遣し、何とか殲滅したそうだが、ちなみに殲滅するのに七日かかったそうだが、どうやら人類は滅びずに済んだらしい。

これが後から『天界』にある『機関』の職員に愚痴混じりに聞いた話だ。

超展開だが事実は事実なのだ。

俺は前世や転生時の記憶をほぼ取り戻したんだから。

その『SPOO^{スライ}』が一体何故こんな場所に居るのだろうか？

コイツの登場は流石に俺も想定外だった。

だがこの事から新たに明らかになった事実もある。

やはりこの世界には俺以外の『トリッパー』が居る……もしくは過去に居たようだ。

どうしてそこまで言い切れるのか？

その詳しい説明は今回ちょっと長くなるから勘弁して欲しい。
その代わりにかなり端折って説明はするが。

そもそも『S P O O』には最初は『^{スプー}実体が無い』。
それを便宜上『素体』と呼ぶ事にする。

そして『素体』にあの恐ろしい姿を与えて『^{スプー}S P O O』にしたのは
『画伯』の潜在意識に眠る『恐怖』なのである。

つまりあの姿は『画伯』の中の恐怖を具現化したモノであり、何も
知らない他人が『素体』を認識していたら別の姿を取るのは至極当
然な事だ。

そう。『素体』とは不確定な存在であり、誰かが認識していなければ
具現化すら出来ないという非常に曖昧かつ繊細な存在なのだ。

そして『素体』の最大の特徴は、それを認識した者の記憶の中から
その者が一番恐いと思っているモノのイメージを読み取り姿形を変
化させる事だ。

ただし読み取るのに少し時間がかかるためにある程度の時間が経た
ないと実体化は出来ないが。

それなのに目の前に居る『^{スプー}S P O O』は俺が見た時には既に実体化
していた。

それも俺が知っている『^{スプー}S P O O』そのものの姿になって。

後は解るな？

つまり……ここに『^{スプー}S P O O』を具現化させたのは、あの事件に関
わった関係者以外には存在しないのだ！

まあそれだけでも数十億人は軽く超えそうなんですけど……

ここから導き出せる結論は……俺より先にあの事件に巻き込まれた被害者が『トリッパー』となって『素体』を認識したという事になる。

もしくは『画伯』本人が『トリッパー』となって召喚した可能性も否定できない。

正直それは考えたくない可能性なのだが、考慮せざるを得ないだろう。

まあその可能性はかなり低いが。

もし『本物』だったら目を合わせただけで精神を汚染されるからだ。二セモノで助かった……

だがこの『S P O O^{スプー}』を生み出した『トリッパー』は一体どこに居るのだろうか？

それに何故この時間軸に居るのだろうか？

この姿を知っているという事は、つまり俺と同時時間軸に存在していたという事だ。

だが仮に同じ世界に転生するのなら、転生する時間軸は同じはず。むしろ最初に死んだ俺は一番最初の方に転生しなければおかしい。

まあ前世と今の世界の時間軸が一緒であると仮定した場合だから、それを確認する術が無い状態で何を考えても最初から無駄なんだが。狂っているかどうか解らない物差しでいくら対象物を調べても、正確な数値など出せる訳が無い。

もしかしたら同時時間軸に死んだとしても、『機関』の『てんせい課』の各職員の能力によっては手続きの違いで転生時間に差が出てきてしまうかも知れないし、それが転生先での時間軸に与える影響も無視出来ないだろう。

ちなみに『てんせい課』とは、『ありとあらゆる“てんせい”を管理する課』らしい。

その『てんせい』にも色々なカテゴリーがあるそうで、大きく分けて

？転生者（魂のみ時間軸移動がメイン）

？転世者（肉体ごと世界移動がメイン）

？転精者（魂のみ世界移動がメイン）

？転性者（性別転換がメイン）

？転星者（星間移動がメイン）

の五つがあるそうだ。

俺は？に当て嵌まるらしい。

俺的には？じゃねえ？　と思っただが、一応転生のために一度『ソウルロンダリング』とやらを経験したから全然違うそうだ。

まあそれは『王子様』が言っていた事だから本当かどうかは解らないが。

閑話休題。

まあ結論から言うと、俺は今かなりヤバイ状態に陥っているかも知れないのだ。

窓の外に居る『SP^{スプー}OO』も『師匠』もそれなりにヤバイかも知れないが、俺が危険視しているのは『トリッパー』の方だ。

もしかしたら今の俺よりも遥かにチート仕様の奴が居て、仮にソイツが前世の記憶やら何やらを所持していたら……諸悪の根源である俺達に恨みを持っている可能性は非常に高いからだ。

まあいい。考えるのは後だ。

今は『師匠』から逃げなければならない。

だが今の『スロット』だと正直難しいので、俺は外の『S P O O^{スプー}』に注意しつつ『スロット』を組み直す事にした。

ココが『魔大陸』だとしたら 奥に行けば行くほどに超強い『魔獣』達が腐るほどゴロゴロしているはず。

対する今の俺の仕様はあくまで対人目的。

これでは『魔獣』相手に負けないだろうが勝てもしない。

まあさつきまで相手が村人だと思っていたのだから仕方が無い。

一般的な『魔獣』は『銃』を持つ村人に比べれば弱い。
だがその代わりに数が多過ぎる。

さらにここは『魔大陸』……十年後と同じなら、ここに居る『魔獣』は超強いはずだ。

ここは人間が居ないために『魔獣』の楽園と化しているからだ。
その代わりに弱肉強食がハンパない。

まるでここは何かの本で読んだような『^{こどく}蠱毒』の集大成のようだ。
少なくとも『気配察知』や『魔法探知』による反応の大きさは東大陸の比じゃない。

まともに正面から相手をしていたら、すぐに俺の魔力が尽きてしま
うだろう。

でも逃げた後はどうしようか

そもそも俺は『精霊登至』で時間軸をズラされて過去の俺と会った
訳なんだが、また別の時間軸に飛ばされるとは正直予想外だ。

俺は果たして元々居た時間軸に戻るのだろうか？

「おい」

何だようるさいな……

今俺は凄く重要な事について考えてるんだから邪魔すんなよ」

「……今お前は何について考えてるんだ？」

「『精霊登至』を使った影響で過去に飛ばされたけど、色々あってさらに過去に飛ばされたから困ってるんだよ」

「ほう……『精霊登至』だと？ 何でそんなモノをお前が持っているんだ？」

「それは『師匠』に……ん？」

ちよつと待て。

一体俺は『誰』と話していたんだ？

……やべエエエエエエ！

『思った事を口に出してしまう』というような重度の精神病の疑いがあるのも超ヤバイが、今はそれどころじゃ……早く逃げ……痛ッ！

「ちよつと詳しく『OHANASHI』しようか？」

俺の肩をガッチリ掴んだ『師匠』がイイ笑顔で話し掛けてきた。

「ひいひいひい　　！」

思わず悲鳴を上げてしまった俺の脳裏にはある言葉が浮かんでいた。

大魔王からは逃げられない

閑話 『王子様』と『メイド』の内緒話

ここは『世界図書館』のほぼ中心部に位置し、この艦^{フネ}にとって一番重要な場所でもある『戦闘指揮所』内。

その中では鑑定士から『王子様』と勝手に渾名で呼ばれている金髪の少年が、美しいメイドを侍らせながら目の前にある一際大きなモニターに映し出されている光景を見て興奮していた。

「あれは……もしかして！

うわーテンション上がって来たよ！ あれが噂の『OHANASHI』か！

ふふふ……まさかリアルタイムで見れるとはね。

……あははは！ あれを見てよ！ 何て不様で面白いんだ彼は！
ローズ、君もそう思わないかい？」

興奮した少年は傍らに静かに控えている『メイド』 名前はローズというらしい に同意を求めた。

「左様でございます、主様」

ローズは礼儀正しく肯定の意を返した。

彼女の主が普段に比べて非常に変なのは認識しているが、そこは主に忠実なメイドの見本みたいな存在である彼女は華麗にスルーしている。

その答えに満足したのか、ニツコリしながら彼は尚も会話を続けた。

「それにしても……本当に驚いたよ。

まさか鑑定士の彼だけじゃなく、行方不明になったはずの『彼』
『ま』であの時空間に居るとはね……

流石にこれは僕にも想定外だったよ。

もしかしてこれは偶然ではなくて必然なのかな？

……それとも誰かが密かに仕組んだ『別シナリオ』？

いや……それは無いと思うんだけど……でも……」

後半はローズが返事をしない事で傍目からはほとんど独り言を呟く
少年のようになっていたが、ローズはあえて沈黙を貫いた。

彼女の主はこんな風に独り言をしながら考え込む癖があり、下手に
相槌を打つと彼の思考を中断させてしまう可能性があるからだ。
たまに彼女がそう勘違いしてただけで実際は全然場合もあるのだ
が、どちらにしろ彼女が過ちを犯したとしても、彼女の主は優しい
のでその程度で叱ったりなど絶対にしないだろうが。

今回はどうやら彼女の予想通り色々と思いを重ねていたようで、結
果的に主に声をかけない事は正解だったようだ。

そして彼女の主は彼女に自分の知識の確認のために質問をしてきた。

「ローズ。僕の記憶が正しければ、確か向こうの『アーカイヴ』と
違ってこっちの『アーカイヴ』のデータ改竄はとても難しいはずだ
よね？」

問われたローズは即座に答えた。

「はい。主様のおっしゃる通りです。

改竄の可能性はほぼ……いえ、全く無いとは言いませんが、幾
つかの理由によりそのような改竄行為は無いと私めは思考いたしま
す」

「君の意見を詳しく聞きたいな」

「畏まりました。」

主様も既にご存知の様に、こちらの『アーカイヴ』はこの世界に残された『世界図書館』三艦全てを常時リンクする『トリニティクラウドコンピューティング』方式を採用しています。

そうする事により仮に誰かが他の『世界図書館』の防御壁を破壊し、そこから『アーカイヴ』データ改竄をしようとしたとしても絶対に不可能です。

何故なら、残り二つの『世界図書館』によって即座に書き換えられた箇所のデータを修復し、かつ同時にカウンターアタックを仕掛けてその『世界図書館』のコントロールを奪取出来るからです。

ですが仮に二つの『世界図書館』を何者かに奪われた場合は、データ改竄が成功する可能性はかなり高くなってしまいます。

しかしいくら何でもそうなる前に『マスター・キー』を所持なさっている主様が気付かない訳がありませんし、ならば最初からそんな仮定をする事自体が無駄な事かと……

もし仮に最悪の場合を想定したとしても、他の『世界図書館』とのリンクを切断すればこの『アーカイヴ』だけは守る事が可能です。ですがそもそも『精霊王』達に護られている『世界図書館』を何者かに乗っ取られるという可能性は限りなく低いと思われるので、結論としては何者かによる改竄の可能性は無視してもよろしいかと思われます。以上です。」

少年はその説明を黙って聞いていたのだが、

「うん……そうだね！　じゃあやっぱり偶然の可能性が高いかなん！　納得した！　ありがとうローズ！」

と満面の笑みを返してきた。

内心では（ああ……私めにその笑顔はどんな宝石を貰うよりも嬉しいです！）と思いながら、それを顔に出さないようにして彼女はあの疑問点について質問をした。

「恐悦至極にございます……あの、少し質問をしてもよろしいでしょうか？」

「ん？ 僕に解る事なら何でもいいよ？」

「どうしてあの青年にそれほどに御執心なのですか？」

確かに人間がこの『世界図書館』に辿り着けたのは凄いと云うより常識外れと思うのですが……」

そう。この『世界図書館』に偶然かつ精神のみとはいえ辿り着いた時点で、彼は普通の人ではないのだ。

ある意味変態かも知れないとローズは思っている。

「……そうだね。君には言っても構わないかな。その代わり、誰にも内緒だからね？」

彼は……簡単に言えば僕の昔からの知人なんだよ」

「そうだったんですか！？」

だがローズが知るかぎり彼女の主もあの青年もそんな素振りが全然感じられなかった。

その疑問に答えるかのように少年は続けた。

「ああ……確かに僕らは知人同士には見えなかったよね？」

まあ色々理由があるんだけど、一番の要因は今の僕の外見が彼の

記憶の中にある僕本来の姿と比べたら別人と言ってもいいくらいに
凄く変わってしまったからかな？」

「……そうだったんですか……（でも……）」

新たに別の疑問が湧いてきたにも関わらずそれを飲み込んだ彼女だ
ったが、それすら彼女の主は見抜いていたようだ。

「あ、別に遠慮しなくてもいいよ。

一応ただの『人間』でしかない彼と『タイザイシャ』である僕が、
一体どこで出会ったかが解らないから不思議に思っているんだよね？
だって君と僕はここ千年ほどほぼ一緒に行動していたし、わざわざ
人間と交流しているような余裕は実際無かったしね。

でもそれはまだ秘密にさせて貰おうかな？ 本当にごめんね？」

そう言っただけ少年はローズに詫びた。

それに対しローズは酷く狼狽した。どちらかと言えば主に不躰な質
問をした己の方が悪いと彼女は思っていたのだから。

「！ いいえ！ こちらこそ差し出がましい事を聞いてしまい申し
訳ありませんでした！」

「まあ気長に待っててよ。いつか機会があったら話すからさ」

「……はい。ありがとうございます」

ローズは深々と頭を下げた。

その様子を尻目に少年は再び考え込む。

（だがやはりおかしいよね？

そもそも何故『彼』があの特徴軸に居る理由がわからないし、もし『彼』が本物ならあの時に乗っていた『零番艦』は一体どこに存在しているのかな？

それに僕たち『七つの“タイザイシャ”』に連絡すら入れてこないとは……『彼』は一体何をコソコソやっているんだか。

……駄目だ。明らかに情報不足だから行動の指針すら読めないや。でも今はまだ僕がここから動く訳にはいかないし、ローズには荷が重過ぎるし。

今動けるとしたら……『奴』……かな？

僕としてはあまり借りを作りたくない相手なんだけど、この際仕方ないか)

「ローズ。ちょっと連絡を取って欲しい相手が居るんだけどいいかな？」

「あ、はい！ どなた様ですか？」

それに少年は凄く嫌そうな声で返答した。

「……『自惚れ屋』だよ」

鑑定士、ぶっちゃける

俺はあの後も諦めずに本気かつ全力の逃走を試みたのだが、そんなモノなど全く意に介さないような廃スペックを誇る『師匠』によって無力化されてしまった。

覚えているのはそこまでであり、それから後に一体何が起きたのかを一切覚えていない。

だが、このゾワゾワとした嫌な感じはよく覚えている。
どうやら俺は『師匠』によって『OHANASHI』されてしまったらしい。

記憶が曖昧なのはその追加効果というより副作用のようだ。
どうやら『OHANASHI』には受けた相手を洗脳に近い状態へと強制的にシフトさせる効果が付加されているようだ。

例：白い奴に全力全壊で『OHANASHI』された金髪幼女

正直『OHANASHI』を舐めていたと言っても過言ではないだろう。

まさか『亞精霊』と化した俺にまで『こうかはばつぐんだ！』とは思わなかったのだから。

『精霊登至』によつて『精霊』に至る寸前に村人に『銃』で撃たれ、その時に感じた激痛の影響で精神が肉体に引っ張られてしまい、結果として中途半端な『亞精霊』になってしまった俺の身体。

しかし『王子様』との出会いから得たヒントから、俺は魔法を自分の身体に付与する事で一時的に『精霊』に変化出来るようになったのだ。

ちなみに自身への魔法付与を俺は『スロット』と呼んでおり、最大で五つ付与できる。

『王子様』曰く、『スロット』の最大数はもつと増えるそうだ。

まあ有る意味油断していたと言われても仕方が無いし、逆にいい勉強になった。

今後『OHANASHI』を防ぐには、常に『スロット』に『状態固定』とかを入れておけば大丈夫だろう……多分。

ただし『状態固定』には時間制限があるために、完全に防ぐには常時発動させなければならぬのだが、そうすると結果的に『魔力切れ』を起こす恐れがあるから気をつけねばならないが。

いや……正確に言えば『魔力切れ』を起こした場合、最悪俺が『死ぬ』。

色々あつて『亞精霊』になつてしまつた俺はもはや普通の生命体ですらない。

あえて言うなら『魔法生物』とかが近いかも知れない。

つまり今の俺は魔力で動いているので、『魔力が切れる』消滅するのだ。

まあ仮に消滅しても『アーカイヴ』に『バックアップ』があるから大丈夫だけだな！

その詳しい話はまた後で。

そんな訳で今回は『OHANASHI』効果によって少しぶつちや

けてしまったようだ。

だが他人に言つてはならない俺の秘密（俺の一族とか能力とか）は何か『師匠』には一切話していないようなので正直助かった。どうやら『OHANASHI』による洗脳効果には欠点があり、曖昧に質問された内容には正確に答えられないようだ。

もちろんその時の記憶は全く無いから全ては推測に過ぎないのだが、俺の話を聞いてから考え込んでいる『師匠』の様子を見て何となくそう思った。

普通あんな事を言われたら、いくら『師匠』が色々な意味で規格外だといつても少しくらいうるたえるだろう常識で考えて……

ちなみに俺は今まで転生した事を誰にも話した事は無い。

小さい頃は当然前世の記憶なんか無かったので、まさか自分が転生者とは夢にすら思つていなかったし、怪我をして前世の記憶を取り戻してからも果たしてこの記憶が本当に前世の記憶であるのか判断出来なかったからだ。

一応『鑑定』の事は両親には話していたが、流石にこっちは空気を讀んで話さなかった。

俺の住んでいた村は個人の能力云々よりも協調性を重視する傾向があったので、もし前世がどうやらこうやら言っていたら下手をすれば座敷牢に監禁されてしまうか……最悪『処理』されていただろう。その可能性に気がついたのが前世の記憶の御蔭という矛盾を抱えていたが、結果的にはよかったと個人的に思っている。

閑話休題。

まあそんな訳で（？）、俺の前には目を閉じながら黙りこんだ師匠が居る。

この鬼気迫る無言の圧力で胃が痛いので早く解放して欲しい。
まあ駄目だろうが。

多分俺の言った内容を自分の知識と照らし合わせて検証しているの
だろう。

……もしかしてこんな気を俺に当てながら実は寝てるんじゃないか
？　と思い始めた頃、漸く『師匠』は目を開いた。
予想と違い寝てはいなかったようだ。

『師匠』は重々しい口調でこう話し出した。

「……多分だがお前さんが持っている『精霊登至』が誤作動を起こ
したんだろうな」

「誤作動？」

「過去に飛ばされた時、近くに『オーバーテクノロジー』……それ
もかなり高度な技術が使われているモノが無かったかい？」

「……あ！」

そう言われて俺には思い当たる節があった。

それは『魔属』と『銃』である。

『魔属』。

外宇宙から来た侵略者であり、俺の前世でいう所の『トンデモ科学』
すら遥かに超えた『オーバーテクノロジー異質技術』を駆使するという厨二病の心をくす
ぐる存在である。

ただし外見は『G』に酷似している点が非常に残念だ。

そして『銃』。

かつて魔大戦よりもさらに昔に『魔族』が生み出したとも伝えられる『ロストテクノロジー遺失技術』の一種であり、その起源は『オーバーテクノロジー異質技術』とも言われている、これまた厨二病兵器。

物理的な存在だけでなく精神的な存在すら滅ぼせるスペックを秘めているために『神々』や『精霊』から忌み嫌われ、そのせいで『魔大戦』以後はサーチアンドデストロイされたために現存するモノが非常に少ないシロモノ。

実はこの兵器の『ソース情報』自体は既に所持しているのだが、『オーバーテクノロジー異質技術』の部分がどうしても完全には解読できないのだ。

例えばこんな文章が延々と書いてあるのだ。

『くあwせdrftgyふじこ1p;:@:』

（俺には全く理解出来ない……多分『エンコード』が違ったために解らなくなっているのだとは予想出来るのだが、その『エンコード』をどうやって入手するかが不明なので俺には『銃』を複製する事が出来ない。

これがあれば『魔族』を倒すのが楽になるのに……）

そう考え込んでいる俺に『師匠』が話しかけてきた。

「何か思い当たる節はあるのか？」

「……『魔族』と『銃』ですかね」

「？ 『銃』は解るが……何だその『魔族』とは？ 『魔族』とは違うのかい？」

「はあ？ 何で『師匠』が知らないんですか！」

「そんな事言われても初耳なのだが……」

俺は驚いた。そもそも『魔属』の存在を教えてくれたのは『師匠』だったからだ。

（……何かがおかしい。何がおかしいのか説明出来ないのが酷くもどかしい。

自分の認識できない場所で一体何が起きているのだろうか？）

そこまで考えた時に聞いた事のない第三者の声がその場所に響いた。

「お！ やつぱり『王』じゃん！ 何でこんな時間軸に存在してるんだ？

『王子』から聞いた時は一体何の冗談かと思ったが……

確かにお前は『あの時』俺がちゃんと『殺した』はずなのになあ？」

そして目の前の空間が歪みはじめ、一人の男が現れた。

俺はその男を見て凄く驚いた。

何故ならその男は……『呪われし一族』の特徴である『銀髪＋オツドアイ』という外見をしていたからだ。

だがその男に対する『師匠』はある意味『師匠』だった。

「誰だお前？ 俺の知り合いにそんな厨二な外見を持つ馬鹿は居ない！ 帰れ！」

その瞬間色々な意味で空気が凍りついた。

……もう俺帰っていいですか？

鑑定士、ぶっちゃける（後書き）

少し思う所があり、感想を閉じさせていただきました。
何とぞご了承くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561n/>

鑑定士な日々

2011年3月10日12時37分発行